



セラエノ小さな物語 2

～大人になるまで死ななかった子供たちの童話～

嶋戸悠祐
齊藤想
カミツキレイニ
いづみみなみ
まるたん
八川克也
井上裕之
平渡敏
一田和樹



はじめに

小説現代「ショートショートコンテスト」、S-Fマガジン「リーダーズ ストーリー」掲載常連5名と、プロ作家3名、マンガ家1名による、ショートショートと短編のアンソロジーです。

前回の「セラエノの小さな物語」では、参加者それぞれが自由なテーマのショートショート5本を寄稿しました。

今回は、誰でも知っている童話をモチーフにした作品を持ち寄りました。形式は、ショートショートもしくは短編。

各人各様の奇想をお楽しみください。

表紙の絵を描いていただいたのは、マンガ家のまるたんさんです。

なお、掲載は誕生日順になっております。

2012年2月14日

掲載順 嶋戸悠祐、齊藤想、カミツキレイニー、いづみみなみ、まるたん、八川克也、井上裕之、平渡敏、一田和樹

前作 [『セラエノの小さな物語』](#)

自己紹介 嶋戸悠祐

はじめまして、嶋戸悠祐と申します。ふだんはミステリーやホラーを書いています。

第三回福山ミステリー文学新人賞の優秀賞を頂き、昨年8月、講談社よりデビュー致しました。もし、今回の短編で興味をもたれましたら、ぜひ、デビュー作の長編の方もよろしくお願い致します。

[講談社ノベルス『キョウダイ』](#)

耳をつんざくような悲鳴が聞こえた。

声の主は、泣き叫び、暴れ狂っている。手足を全力で振り回し、必死に抵抗しているようだ。固い壁を爪でガリガリと搔き毟るような音が聞こえて、耳を塞ぎたくなる。ガチャリと何かの音がした。

同時に悲鳴はまるで怪鳥が嘶（いなな）くような恐ろしいモノとなった。もはや人の声ではない。その悲鳴にさめざめと泣く、幼い声が複数重なる。

いったい何が起きているのだろうか——。

両足が小刻みに震えだした。耳を塞ぎ、絶叫と泣き声を遮断する。僕は震える足で、仄かに灯りの見える方へと進んだ。すると目の前に立ちはだかるものがあった。

縦にいくつも連なる鉄の棒——鉄格子だ。

両手で握ってみる。ひんやりと冷たい。そのまま全力で引っ張る。次はガンガン叩いた。びくともしない。その隙間は狭く、頭も通らない。

僕は檻の中に囚われていた——。

檻のすぐ外には薄暗い通路がはしっていた。小さなランプが一つ、天井からぶらさがり、ゆらゆらと揺れていた。

鉄格子に顔を押しつけて、絶叫の聞こえる方を見やった。仄かなオレンジの灯りの向こう側、通路の奥の方に、何かが見えた。

それは——男の子の顔だった——。

闇の中にぼんやりと浮かび上がったそれは、こちらを向いていた。その顔は恐怖に歪み、涙と鼻水とよだれがまじり合い、テラテラと光っていた。

そのとき、男の子の背後に恐ろしく大きな影が見えた。男の子はその、大きな何かに、捕らわれ、通路の奥へと引きずられていく。手を振り回し、両足を地面に踏ん張って抵抗しているのだが、影の化物は、ものともしない。男の子の姿は徐々に遠ざかってゆく。その先は完全なる闇だ。そのまま男の子は闇に消えた。

同時に絶叫もピタリと止んだ。重なり聞こえていた子供の泣き声も、それが合図であったかのように、いつのまにか、耳には届かない。

僕は鉄格子から手を放した。よろよろとよろめき、そのまま地面に尻餅をついた。地面は土だった。ざらざらとかたく、冷たい。しばらくして立ち上がり、壁を調べた。地面と同じかたさ、そして同じように冷たい土でできていた。耳を当ててみる。何も聞こえない。壁は垂直ではなかった。天井へ向かうに従い、ゆるりと湾曲していた。まっすぐに切り立った山肌の、土の断面を穿って穴を開け、その入口に鉄格子を取り付けて檻をつくった。そんなイメージが頭の中に浮かんだ。

檻の一番奥には、丸い木の蓋が置かれていた。蓋を開けた。そこには穴が掘ってあり、糞尿が塗れていた。凄まじい臭気に仰け反り、地面に嘔吐した。鼻と口を押さえながら必死に蓋を戻す。

大きな足音が聞こえる。思考が遮断される。

どこかでまたガチャリと音がした。そして悲鳴——。ずるずると何かを引き摺る音がした——。再びガチャリと音がする——。また悲鳴——。これは別の子供の悲鳴に聞こえた。

そしてまた引き摺る音——。ガチャリ——。悲鳴——。複数のすすり泣きが、またそれに重なる。

不可解な音の連鎖は徐々に、こちらへと近づいてくる。僕は、かたい地面の上で膝を抱えて、がたがたと震えていた。

足音が聞こえた。近い。あきらかにこの檻を目指している。大きな影が見えた。

檻の前に、山のように大きな男が現れた。

男は見上げるほどの高さで、すべてが大きかった。足も、膝も、腹も、手も、胸も、肩も、首も、顔も——それを形成する目も、鼻も、口も、耳も——あらゆる部位が規格外に大きいのだ。

男は裸だった。腰に布切れを一つだけ巻いている。体中毛むくじゃらだ。何か油みたいなのを塗っているのか、それとも異常に汗かきなのか、体全体がぬらぬらと光っていた。反対に頭はきれいに禿げあがり、髪の毛は一本もなかった。

男の、大きな二つの目玉が僕をとらえた。すると男はニタア、と笑った。男は檻の一番右端まで歩き、鉄格子の前でガチャガチャと何かをしていた。すると、例のガチャリ、という音がして、鉄柵が三本外れた。そこから男は、のそりと檻の中に入ってきた。僕は後ずさった。だが逃げ道などない。その巨体に似合わず、男の動きは恐ろしいほど素早かった。僕はすぐに捕まった。大声で泣き叫んだ。あらん限りの力を手足に込めて、抵抗しようとするが、羽交い絞めにされたままピクリとも動かさない。男の体は生臭く、獣みたいな臭いがした。そのまま物凄い力で引き摺られて、檻の外に出された。

薄暗い通路を進み、すぐに、またどこか暗いところに入った。そのまま投げ飛ばされた。固い場所に腹を打ちつけ、息ができずにゴロゴロと転げまわる。

またガチャリと音が聞こえた——。

痛みがようやく和らぎ、顔を上げた。信じられない光景だった。先ほどと同じ場所にいた。起き上がり腹をおさえながらゆっくりと歩く。目の前には冷たくてかたい鉄格子が立ちふさがっている。地面は冷たく、かたい土だった。壁も地面と同じようにかたく、天井に向かって湾曲している。檻の一番奥には木製の丸い蓋があり、その隙間から臭気が漏れていた。

まったく同じつくりだ——。

一度、檻の外に出たのは間違いないのだ。同じような檻が複数あるのだろうか——。だけど、いったい何のために——。わからないことだらけだった。

ふと思いつくことがあり鉄格子に近づく。一番右端から三つ目までの鉄柵を確認した。大男は鉄格子を外して中に入ってきたのだ。この檻がさきほどとは別の檻だとしても、まったく同じ仕掛けが施されている可能性は極めて高い。見ると、鉄柵の上下に、二箇所、垂直に並ぶ三本を橋渡しする格好で、水平に鉄の棒が二本、渡っていた。一番右端の、鉄柵の裏側をまさぐると奇妙な形状の凹みがあった。

わかった。これは鍵穴だ。この三本の棒だけは、二本の橋渡しにより、固定されることで、一

枚の扉になっていたのだ。大男はここに鍵を差しこみ、扉を開けたのだ。今はきちんと施錠されて、やはり他の鉄柵と同じようにびくともしない。

相変わらずどこからか、すすり泣く声が聞こえる。通路を見ると、今は誰の姿もない。急に、体に入らなくなり、かたい地面の上へ、大の字に寝転がった。

気がつくと、僕はそのまま眠りに落ちていた——。

「——ちゃん……」

誰かの声が聞こえる。

「——にいちゃん……」

聞き覚えのある、この声は——。僕は眠りから覚めた。

「お兄ちゃん……」

「グレーテル！」

僕は叫んでいた。目の前にいるのは妹だった。それはまぎれもなく妹のグレーテルなのだ。駆け寄った。だが鉄格子が邪魔をして抱きしめることはできない。涙で視界が濁る。

「グレーテル……グレーテル……おまえ無事だったのか……」

「お兄ちゃん、だめ、小さな声で話して、大男と魔女にみつかってしまう……」

グレーテルはそう言って唇に人差し指をあてた。

「魔女……？」

「おぼえてないの？ わたしたち魔女につかまったのよ……」

魔女に——。どうも記憶がはっきりとしない。

「わたしたち……お父さんとお母さんに森へ捨てられたの……そのまま森をさまよってたら、お菓子でできたお家があって……それに気をとられている際に……魔女に襲われたのよ……」

思い出した——。僕は今、はっきりと思い出していた。

そう。僕たち二人は両親に捨てられたのだ。僕は捨てられる前の晩の、二人の会話を盗み聞いていた。

（もう限界なの……あなたもわかるでしょ……このままじゃ四人全員が餓死してしまうわ……もともと無理だったのよ……子供二人なんて……明日、森へ二人を連れて行くわ……）

（まあ、待てよ。それはいくらなんでもかわいそうだ……そうだ、二人は無理でも、一人なら何とかなるんじゃないか……グレーテルだけでも……女の子一人分の食べ物なら、それほど負担にならない……）

母親の影が動いた。影は無言のまま、ゆっくりと首を振っていた。

こうして次の日、僕ら二人は森に捨てられた。

二人のことは許さない。愛情のかけらも無い冷酷な母親。そして変態野郎の父親は、生きて帰ったら絶対に殺してやる——。

グレーテルの目から涙がこぼれ落ちた。

煤や泥で汚れた頬に二筋の細い道ができる。グレーテルの肌は雪のように真っ白で透きとおっていたのに——。今や見る影もない。

「可哀そうに……大丈夫……大丈夫だよ……グレーテル……お兄ちゃんが、ここを抜け出して必ず助けてやるからな」

グレーテルは嗚咽しながら頷く。僕は指先でグレーテルの涙を拭いてやった。

グレーテルは薄汚れた薄い布のようなものを着ていた。そして裸足だった。両足には金属の足枷が嵌められていて、その先には丸い鉄の塊があった。よく見ると膝や腕にいくつもの傷があり、血が滲んでいる。

「グレーテル……おまえケガしてるじゃないか……いったい何をされたんだ……」

僕はグレーテルの手を握った。温かい。グレーテルの体温を感じた。グレーテルの指は滑らかで細かった——。だが手のひらは赤く、ざらざらしていた。小さな指の爪はひびが入ったり、割れたりしていた。

「お兄ちゃん……わたし……魔女の身の回りの世話をさせられてるの……でも、なかなか上手にできなくて……」

そのとき、どこからか足音が聞こえた。グレーテルは、隠れて、と小さく叫んだ。僕は急いでグレーテルからはなれ、檻の奥に身を隠した。グレーテルの足音が遠ざかる。どこからか聞こえていた足音はいつのまにか消えていた。

それから、どれほどの時間が過ぎたのか——次に聞こえたのは、重い物を引き摺りながら歩く足音だった。

グレーテル——。

そう言いかけて口をつぐんだ。グレーテルが現われた、すぐその後ろに、とてつもなく大きな影が見えたからだ。グレーテルの背後には、あの大男がいた。大男は大きな寸胴鍋を両手で抱えていた。檻の前で大男は、一度、鍋をおろし、鍵を使って檻を開けた。また鍋を抱えて、のそりと檻の中に入ってくる。僕は恐ろしくてたまらなくなり、檻の奥で、身をかたくしていた。鍋を置いた大男は檻の入口に立っていた。入れ替わるようにしてグレーテルが中へ入ってきた。鍋の横に座り、僕の方を向いて手招きをする。

「お兄ちゃん、私のところへ来て……大男は襲ってこない……大丈夫だから……」

僕はゆっくりとグレーテルの方へと向かう。グレーテルがいるのは檻の中央だ。本当に大丈夫だろうか——。大男は檻の入口から僕らの様子を窺っている。入口を塞いでいるのだ。

「座って。大丈夫……大丈夫だから」

僕は言われるとおりにグレーテルの横に座った。グレーテルが鍋の蓋を開ける。グツグツと煮えたぎっているが、それはひどく生臭かった。

「お肉のスープよ……食べて」

そう言ってグレーテルは鍋の中のモノをカップにすくい、僕に差し出した。なみなみに盛られたそれは、赤黒く混濁していて、とても食欲をそそるものではなかった。

「でも……」

「食べて。食べなきゃ殺される」

グレーテルは無表情のまま、早口で言った。目は真剣そのものだった。大男の視線が突き刺さる。

僕は只ならぬものを感じて、カップを受け取り、それを口の中へとかきこんだ。見た目ほど不味くはないが、ひどく薄味だった。お湯にほんの少しの塩コショウをかけたような、そんな味——。しかもあれほど煮えたぎっていたのに、なぜかゴロゴロと半生の肉が入っていて飲み込むのにも一苦労だった。それでもなんとかカップを空にした。胸がムカムカして気持ちが悪い。

するとグレーテルは目の前で信じられない行動をとった。空になったカップを取りあげ、また鍋からスープをすくい取り、なみなみとカップに盛り、僕の前に差し出したのだ。

「もう一杯食べて……」

「嘘だろ……無理だよ……これ以上、一口だって入らない……」

「お願い……食べて……食べなきゃ本当に殺されちゃうの……早く……」

グレーテルの頬に涙が伝った。大男はグレーテルの差し出したカップを睨みつけている。僕はグレーテルからカップをひったくるように取り、死に物狂いでかきこんだ。腹が膨れ上がり、喉の奥にゴロゴロとした肉がぎゅうぎゅうに詰まっているような、ひどい息苦しさを感じた。それでも何とか食べ終えた。胸も腹も苦しい。破裂しそうだ。だが不思議と嘔吐しそうな苦しさではなかった。

やっとグレーテルが鍋の蓋を閉めた。

すると大男が檻の中に入ってきた。だが、もう一歩だって動けない。しかし、大男は僕に見向きもせず、鍋を持ち上げて、檻の外へと出た。グレーテルがそれに続いた。ガチャリと檻が閉まり、また鍵がかけられた。腹をおさえて、しばらく身動きもできずにうずくまっていた。

どこかでグレーテルの悲鳴が聞こえた。驚き、飛び起きた。グレーテルの名を呼んだ。途端、絶叫が響き渡る。今のは、グレーテルではない。別の声だ。すぐにその絶叫は、か細いものへと変わり、やがて途絶えた――。

鉄格子の向こう側に大男の姿が見えた。何かを引き摺っている。それは首と、腕と、足があらぬ方向を向いて息絶えている男の子の姿だった。大男はそのまま檻の前を通り過ぎて行った。

嘘じゃなかった――。この子供はスープを食べきれなかったのだ――。そして大男に殺されたのだ――。

その後、拷問とも言える食事は何度も繰り返された。定期的にグレーテルと大男は寸胴鍋を運んできた。いつも同じスープだった。だけど僕は死にたくなかったから必死に食べた。

あるとき大男と一緒に見たこともない、老婆が現れた。

薄汚い黒いローブを着て、顔は皺だらけだった。鼻が異様に大きく、顎まで垂れ下がっていた。反対に目は小さく、皺に埋もれていた。それが魔女だとすぐにわかった。魔女は檻の前に立ち、僕に向かって手招きをした。吸い寄せられるように、勝手に足が動いていた。魔女は、右手の人差し指を出しな、と言った。ひどく甲高くしゃがれた声だった。僕は言われた通りに指を出した。魔女はそれを軽く握った。魔女の手は底冷えするほどに冷たかった。すると魔女は、ヒヒヒ、と笑い、そのまま通路の奥へと姿を消した。

わけがわからぬまま、立ちすくんでいると、大男が入ってきて、僕を捕まえた。さらに隣の檻へと投げ込まれた。もんどりうって倒れ、しばらく痛みに耐えながら大の字に寝転んでいた。

次の日、また周りが悲鳴と絶叫に彩られ、さらに隣の檻へと移された。何が起きているのかまったくわからない――。僕にはただただ、怯えることしかできなかった。

あるとき、寝ていると僕を呼ぶ声がした。すぐに誰だかわかった。グレーテルだ。僕は飛び起きて走りよった。大男の姿はない。

「グレーテル無事か……？」

グレーテルの顔は青白く、ひどくやつれていた。

「私の話を聞いて……すごく重要なことなの」

そうってグレーテルは僕の言葉を遮った。

「わかった……」

その真剣な表情に圧倒され、僕は頷いた。

「時間がないから一度しか言えない……よく聞いて」

ただならぬ雰囲気によって圧倒されるように、また頷くしかなかった。グレーテルは声を潜めながら、だがはっきりとした口調で話しはじめた。

「ここには六つの檻があるの。横一列に並んでいる。それぞれ番号がふられていて、外から檻へ向かって、一番右端が①の檻、左へ番号順に進み、一番左端が⑥の檻よ。全部の檻に男の子が捕らえられているわ。捕まって最初に入れられるのが⑥の檻、そしてある条件を満たすと、一つ数の少ない番号の檻へと移動させられるの……その条件は二つある……」

「条件……」

あまりにも奇妙な話だった。背筋に冷たいものを感じた。

「そうよ……魔女がときどき人差し指を握りに来るでしょ？ 魔女はほとんど目が見えないの。だから指を握って、その子供がどれだけ太ったかを検査しに来てるの」

「検査……」

声が震える。

「ええ……検査というのは、具体的には二つの檻の、どちらの子供の指が太いかを確認することなの……。その二つの檻は、①と②、③と④、⑤と⑥、この三つの組み合わせになるわ。数字の小さい檻の子供の指が太い場合は、檻の移動はなし。大きい数字の檻の子供の方が太ければ、檻が入れ替わるの……これが、一つ目の移動の条件よ」

僕はことの恐ろしさに怯えながらも、一方で必死に頭を回転させていた。生き残るために、この情報は物凄く重要に思えたのだ。すると一つ疑問が沸いた。

「ちょっと待て……質問がある……」

グレーテルは言葉を止める。

「常にその組み合わせの比較になるなら、⑤から④、③から②への移動は無くなるんじゃないのか？」

グレーテルのいう組み合わせで比較している限りは大きい数字の子供が一つ下の数字に移動することはあっても、少ない数字の場合は現状維持しかない。

グレーテルは首を振った。

「①と②の比較で、指が相手よりも太かった方は、即、檻から連れ出されて殺されるのよ。空いた檻が出た場合は、その檻を埋めるために自動的に番号が繰り上がるの……。これが二つ目の移動の条件……。そうすると⑥が空くから、そこにまた新たな男の子が追加されるの……」

僕は言葉を失った。だが本当のことなのだろう――。

これで絶叫とすすり泣きにも納得がゆく。絶叫していたのは①か②の、今まさに、連れ出され

て殺されようとしている子供の声、すすり泣きは③以下の檻の子供の声に違いない。

「魔女はなぜこんなことを……」

人の命を虫けら程度にしか思っていない。完全に狂気の沙汰だ。

「魔女は子供を殺して、バラバラに切り刻んでその肉を食べてるの……子供の肉は妖気の源になるらしいわ……男の子の肉じゃなきゃ駄目らしいの……それもできるだけ太って肉のついた男の子が……」

僕はようやくすべてを理解した。不味いスープを無理やり食べさせるのもこのためだ。捕らえた獲物をまるまると太らせ、一番肉のついた獲物を食べる。この檻はそのための装置だったのだ。

「僕は今、何番の檻にいるんだ……」

何回、檻を移動したのかははっきりとは覚えていない——。ただ、移動したのはすべて同じ方向だった。

「今、お兄ちゃんがいるのは……③の檻よ……そして……明日、検査があるわ……」

僕は愕然とした。言葉がでない。だが考えるしかない。検査があるということは①か②の檻の、どちらかが殺されるということだ。するとそこに空きができるから自動的に一つ数の少ない檻へ移動となる。ということは④より指が細ければ③のまま、もしも太ければ②へ移動ということだ……。②の檻に入った時点で死へのリーチがかかる……。

「グレーテル、ぼ、僕は④の子供の指と比べてどうなんだ……」

世話役をしているグレーテルなら④の太り具合も見ているはずだ。だが、グレーテルはうつむき、なかなか口を開こうとしない。

「正直、④の男の子の指の方が細いと思うわ……ここにいる子供たちは皆、私たちと同じように、口減らしで捨てられた子供たちばかりよ。元々、太っている子供なんかいないわ。皆、がりがりに痩せ細っていて……だからどうしても先に入れられてたくさん食べさせられている方が不利になる」

ようやく口を開いた。その答えはあまりにも残酷だった。

「じゃあ……じゃあ……僕はこのまま殺されてしまうのか！」

声を荒げた。死にたくない。死にたくない。こんなところで絶対に死にたくない——。

「お兄ちゃん、声をおさえて……気づかれてしまうわ……」

グレーテルは泣きそうな顔で言った。

「グレーテル……たのむ、助けてくれよ……おまえ、僕の妹だろ……お兄ちゃんを見殺しにする気か……お願いだから助けておくれ……」

僕は妹に泣きすぎるしかなかった。だがグレーテルは何も言わず去っていった。どこかで物音が聞こえたのだ。

その後、グレーテルのいうとおり検査が行なわれた。結果、僕は②の檻に入れられた。④の子供よりも指が太かったのだ。絶望的な気分だった。移動する直前に絶叫が響き渡った。①か②の子供が連れ去られたのだ。

もう後がない。次、比較相手の子供よりも指が太かったら、僕は生きたまま切り刻まれて殺されるのだ。死にたくない。死にたくない。死にたくない。絶対に死にたくない——。グレーテルは

もうあてにはならない。頼れるのは自分だけだ。考えて、考え抜いた。どうしたら助かるのかを――。

そして僕は、悪魔に魂を売ることになった。

最初から気づいていた。大男の、グレーテルを見る目が、あの変態野郎の父親と同じだということ――。

そして食事を運んできたグレーテルに対して、僕は言った。

グレーテルは泣きながら拒否した。僕はグレーテルを殴った。

するとグレーテルは、とぼとぼと歩き、檻の入口を塞いでいる大男の前に立ち、薄汚れた腰巻を下ろし、その股間に顔をうずめた。

最初、大男は驚いた風だったが、すぐにそれは、変態野郎と同じ淫猥な表情へと変わった。僕はスープを飲むフリをして、少しずつだが、中身を地面にこぼした。大男は、チラチラとこちらを見ていたが、快楽に溺れるのに夢中で、僕の行為に気づいていない様子だった。

僕は空になったカップを掲げて、大男に見せた。ようやくグレーテルは顔を上げた。ゴボゴボと咳をして、激しくむせていた。

大男は何も言わず去って行った。僕は地面にこぼしたものをかき集め、汚物入れに投げ捨てた。

この方法で僕は何度か食事を回避した。これで次の検査に向けてだいぶ有利になったはずだ。だが絶対ではない。もしも相手よりも指が太かったら——その敗北は死を意味するのだ。できることはすべてやらなければならない。僕は、またグレーテルを殴り、命令を出した。

グレーテルは命令に従い、頼んだモノを持ってきた。グレーテルの、手の中にあったモノは、子供の、右手の人差し指だった。魔女に気づかれないようにして、切り刻まれた子供の、人差し指だけを盗んでくるよう、命令したのだ。

思ったとおりだった。その青白い指は血が抜けて、僕の人差し指よりもかなり細い。グレーテルの指までとはいかないが、①の子供の指の太さに負けるわけが無かった。そのとき、①の檻で叫び声が聞こえた。身をかたくする。何が起きたのか——。だが、その声は恐怖に怯えるような声ではなかった。例えるなら、何かに立ち向かっていく雄叫びのような——。

僕は立ち上がり、鉄格子に顔を押しつけて、①の檻の様子を窺った。入口に大きな影が見えた。どうやら①の子供は食事中のようだ。鈍い音がして、床か壁に何かが勢いよくぶつかる振動が伝わる。

次にグレーテルの悲鳴が——。その後、グレーテルはしくしく泣いていた。二人が去った後、耳をすますと①の檻から子供の呻き声が聞こえた。

どうやら生きては、いるようだ。

何が起こったかは、だいたい想像がついた。おそらく大男は、我慢できなくなりグレーテルを求めたのだろう。その姿を見て、①の子供はグレーテルを助けようと大男に立ち向って行ったのではないだろうか——。そうだとすれば、何て馬鹿なことをしたのか——。これは命を懸けた戦いなのだ。その状況で、なすべきことはグレーテルを助けることじゃない。それを利用して僕のようにスープをこぼし、食事を誤魔化し、数ミリでも指を細くすることなのに——。僕に負ける要素は一つも見つからなかった。

そして魔女が現れた。

僕は切り刻まれた子供の、右手の人差し指を、魔女の前へ出した。魔女がその指を握る。魔女の目は相変わらず、皺に埋もれている。魔女はすぐに握った指を放し、そのまま①の檻へと向か

った。うまく誤魔化せた。僕は①よりも指が細いことを——勝利を確信した。
しかし——様子がおかしかった。

そろそろ隣から絶叫が聞こえてきてもいいはずなのに、物音一つしない。あきらかに変だ。だが一つの可能性を思いつく。

①の檻の子供は大男にやられて虫の息だった。もはや抵抗する力もなくひっそりと連れ去られて殺されたのかもしれない。そうだ。そうに違いない。

そのときガチャリと音がした。大男が入ってきた。僕の勝利は間違いない。とりあえずは①の檻へと移動しなければならない。僕は抵抗せず自ら檻を出て、①の檻へと向かった。

しかし、目を疑った。①の檻の中には男の子がいたのだ。

入口は閉め切られたまま、男の子は檻の中でぼつんと立っている。

僕は男に羽交い絞めにされた。僕を引き摺り、①の檻の先にある、暗闇に向かって歩き出した。

頭が真っ白になった。何が起きているのかまるでわからない。

なぜだ——。なぜだ——。僕の指の方が細いに決まってる——。僕は勝ったのだ——。そんなはずはない——。僕は力の限り叫んだ。体をねじり、よじり、死に物狂いで暴れた。僕が勝利していることを訴え、大男が勘違いしていることを叫び続けた。

ぼくはまけてない。まけてない。まけるはずがない——。おまえはまちがえている——。はなせ——。はなせ——。はなせ——。

最後は言葉にならぬ声で叫んでいた。

そのとき通路にグレーテルの姿が見えた。

グレーテルにたすけてくれ、と懇願する。だが、グレーテルは何の反応も示さない。無表情のまま引き摺られる僕を眺めていた。なぜだかグレーテルは右手に大きな包帯を巻いており、それは赤黒く染まっていた。

いつのまにかグレーテルの横には魔女が立っていた。

魔女は、ヒヒヒ、と気味悪く笑った。

さらに、①の檻の子供の姿が、通路のそばに見えた。檻の中から鉄格子に顔を寄せている。僕は、卑怯な手を使いやがって、と泣き叫びながら罵った。だが男の子も、グレーテルと同じように、何の反応も示さず、ぼんやりと僕を見ているだけだった。①の檻からもどンドン遠ざかってゆく。仄かに見える灯りも、もう少しで消えてなくなる。

そして闇に消えゆく最後の刹那、僕には、はっきりと見えた。

檻の中の男の子が一瞬、掲げたその手の中には、透き通るように細い、グレーテルの人差し指があった。

自己紹介 齊藤 想 (サイトー)

初めて書いた作品が某出版社の「優秀賞」に選ばれたのがきっかけでショートショートを書き始め、それ以来、第7回大阪ショートショート大賞、第14回一休とんち大賞、SFマガジン・リーダーズストーリー掲載8回などの受賞歴を重ねる。

ひょんなことから、現役のコピーライターで、数多くのシナリオ作成に関わってきたストーリーデザイナー・ぴこ山びこ蔵さんから「ショートショートの作り方のコツをみんなに教えてくれ」と口説かれ、実践的掌編作成術を盛り込んだメルマガ『サイトーマガジン』を創刊。今年で連載5年目に突入。また、楽しみながら書き、かつ作品を完成させることを信条とした掌編講座も開講中。

2010年にサイトーブログを開設。単なる日記にとどまらず、各種公募情報、ネットの海に埋もれている名作紹介など、公募に挑戦を続けるひとたちの助けとなるようなブログを目指している。

もちろん、現在も各種公募に向けて精力的に執筆中。

ブログ：[『サイトーブログ』](#)

メルマガ：[『サイトーマガジン』](#)

[掌編講座](#)

さて、今回の作品は、古典作品であるイソップ寓話に現代社会にそぐうような新しい寓意を与えるべく生まれたシリーズです。合わせて3話。じっくりとでも軽くでも寝ながらでも何でも良いので、お楽しみいただければ幸いです。

それでは、どうぞ！

人里からほど近い荒地に、オオカミたちがたくさん住んでいました。そこに、一匹の小さなオオカミがいます。その子オオカミは、何か動いているのを見つけると、すぐにこう叫ぶのです。「少年がきたぞ！」

オオカミたちは人里の少年に困っていました。なにしろ、とんでもなく目ざとくて、オオカミが少し近づいただけで村中に触れ回るので。オオカミの大好物は、人間たちが大切にしている家畜です。ところが、この少年のせいで、村にはなかなか近づけません。オオカミたちは、この少年を捕まえてとっちめてやろうと思っていたのです。

子オオカミの声を聞いて、大人のオオカミたちが巣穴からでてきました。

「どこにいるのだ」

「ほら、あそこだよ」

子オオカミは鼻先で山頂を指しました。木の上で何かがゆれています。

「バカだなあ。あれはサルだ。人間は木には登らない。お前は人間とサルとの区別もつかないのか。もっと良く見なさい」

大人のオオカミはあきれた顔をしながら巣穴に戻ってきました。

次の日も、子オオカミは「少年がきたぞ」と叫びました。今度こそと大人たちが巣穴から飛び出していくと、杖をついた老人が野原を散歩していました。

「バカだなあ。あれは年を取った人間だ。われらが目の敵としているのは少年だ。杖を持った老人など怖くともなんともない。老人ぐらいで、いちいち大人たちを呼ぶな」

二回も肩透かしを食わされて、大人たちはおかんむりです。子オオカミは、本当に少年がきたときだけ、大人たちを呼ぶようにと念を押されました。

また次の日、子オオカミは人間が歩いているのを見つけました。今回はひとりだけでなく、たくさんいます。

子オオカミは「少年が……」と叫びそうになりました。だけど、昨日、大人たちに怒られたばかりです。歩いている人間たちの中に少年がいるのかどうか、子オオカミは見極めようとしていました。

最初は全員が人間かと思いましたが、一人は木に登り始めました。あれはサルだろうと子オオカミは見当をつけました。こちらに向かってくる人間たちは、全員が杖のような道具を肩にかついでいます。あれは老人だろうと子オオカミは思いました。

「なーんだ。少年はいないじゃないか。慌てて大人たちを呼ばなくてよかった」

子オオカミは安心して、母親の待つ巣穴に戻りました。

そのころ人間たちは、悩まされてきたオオカミの群れを退治するために、猟師を野山に派遣していました。小柄な大人が木に登りオオカミの居場所を突き止め、その指示を受けた大人たちが猟銃を担ぎながらオオカミの巣穴へと近づいて……。

うるさいと 警報とめたら 盗まれた (車失人)

キリギリスは自由でした。

ひとりで生活しているので、親や上司から命令されることはありません。好きなときに草を食べ、好きなときに歌を歌い、好きなときに求婚をします。

それにひきかえ、働きアリの惨めさといったら、どうしたことでしょう。

女王アリが命じるまま、幼虫のエサを探し続け、自分たちはお情けでアブラムシから分けてもらう粗末な液で、細々と命を永らえています。このような人生に、何の意味があるのでしょうか。

キリギリスは、働きアリたちが可哀想でしかたがありませんでした。そこで、自慢の美声を響かせながら、働きアリたちに近づきました。

「君たちは、もっと自由にならないかい？」

みんなで協力してセミの死骸を運んでいた働きアリたちは、首を捻りながらキリギリスに顔を向けました。

「自由ってなんだい？」

この答えに、キリギリスはあきれました。

「自由とは自分の意思で、自分の責任において行動することさ。君たちは女王アリという独裁者の命じるまま、自らの意思に反して働かされている。労働者たちよ。いまこそ立ち上がれ。自由を勝ち取るのだ」

「しかし、女王アリ様は自分たちの母親でもあります」

「それに、私たちがエサを運ばないと、子供たちが困ります」

キリギリスは憤慨のあまり、六本の足を踏み鳴らしました。

「何をいうか。母親といっても、女王アリに世話をしてもらったことあるか？ 自らは安全な巣の奥にいて、娘たちだけを危険な目にあわせている。こんなのは親でもなんでもない。それに仲間がなんだ。彼らは独立できない弱虫だ。自分の弱さを隠すために、自らに言い訳をして、このような不公平な状態に身をうずめているのだ。こんなことが、許されると思っているのか。やつらは、虫権意識のかけらもないのだ。

「ぼくが君たちに声をかけたのは他でもない。君たちが他のアリとは違い、強い心を持っていると信じているからだ。ぼくと君たちが出あったのも何かの縁だ。新しい一歩を踏み出すならいましかない。いますぐにだ」

働きアリたちは相談を始めました。そして、キリギリスに聞きました。

「自由って本当にいいものですか？」

「ああそうだ。このオレを見るがよい。虫権意識を呼び覚ますのだ！」

キリギリスは高らかに喜びの歌を歌い上げました。働きアリたちの気持がぐらりと揺れました。働きアリたちは、運んでいたセミを地面に置きました。

「キリギリスさんが言うように、自由とはとてもいいものかもしれない」

「ぼくたちも自分の意思を持ってみよう」

「生きたいように、生きてみるんだ」

こうして、ギリギリにそそのかされて巣から離れた働きアリたちは、自由に生きるといっても何をしたいかもわからず、かといって、かつての仲間からも相手にされなくなり、暖かい巣穴を思い浮かべながら、ほどなく野垂れ死にをしたそうです。

▼新しい寓意（五七五）△▼△▼△▼

吹き込まれ 雲の上から 落とされて （単純人）

作者注：原作のタイトルは『アリとセンチコガネ』ですが、日本では『アリとギリギリス』として知られているので、通例に倣いました。

あるとき、北風は太陽に相談しました。

「最近、地球温暖化とかで、地球の気温が上昇して人間どもが困っているというではないか。まあ、人間どもが二酸化炭素を増やしたことが原因とはいえ、ここらで地球を冷やしてやらねば、大変なことになるらしい」

「ふむふむ、それなら君がビューっとやってやればいいのではないかね」

「太陽殿もそう思うか。それなら、ひとつ派手にやってみますか」

北風は地球を冷やすためにびゅーっとやりました。しかし、人間たちは北風に対抗するために、石油ストーブやヒーターをガンガンに焚き始めました。人間が住むあらゆる場所に暖房がいきわたります。おかげで二酸化炭素濃度が上昇し、北風が疲れて吹くのを止めると、よけいに気温が上がるようになってしまいました。

「北風君はいつも力づくだね。今度はぼくの番だ。いいかい、よーく見てくれたまえ」

太陽は北風とは逆に地球を温め始めました。人間はストーブやヒーターを使わなくなりましたが、今度は冷房のためにエアコンを回し始めます。エアコンは電力を激しく消費する電化製品です。発電量が上がり、結果として余計に二酸化炭素を排出することとなってしまいました。

「なかなか上手くいかないものだな」

太陽が腕組みをすると、北風が答えました。

「太陽殿が旅人の服を脱がせたような時代とは違うのさ。世の中の進歩にあわせて、我々も学ぶ必要があるかもね」

「ふむ、北風君には何かいい案がありそうだな」

「いがみ合うのを止めて、お互いの得意分野で協力すればいいのさ。ようするに二酸化炭素の排出を止めればいいんだろ？ 二人が力を合わせれば、不可能なことはないと思っているんだ」

そして、北風は太陽に二人が協力する案を説明しました。太陽が頷きました。

「よし、それでは北風君の案で進めてみよう。これで地球温暖化も解決だな」

このときから、地球では異常気象が続きました。

寒い地方では北風が吹き荒れて、作物が冷害にやられて全滅してしまいました。温かい地方では太陽が激しく照り付けて、これまた作物が枯死してしまいました。

人類は大飢饉に陥り、七〇億いた人口は減り続けて三〇億人となりました。

人類全体が消費するエネルギー量も人口に応じて減少し、それに伴い二酸化炭素排出量も減りました。こうして北風と太陽の目論見どおり地球温暖化はストップしたそうです。めでたしめでたし。

▼新しい寓意（五七五）△▼△▼△▼

目的と 手段の混同 大惨事 （猪突人）

Author:カミツキレイニー

第143回Cobalt短編小説新人賞／入選

第13回フェリシモ文学賞／佳作

第5回小学館ライトノベル大賞／ガガガ大賞受賞

彼氏にフラれた私・三浦加奈は、死のうと決意して屋上へ向かう。けれどそこで「カカシ」と名乗る不思議な少女、毒舌の「ブリキ」、ニコニコ顔の「ライオン」と出会う。

ライオンは言う。「どうせ死ぬなら、復讐してからにしませんか？」

そうして私は「ドロシー」になった。西の悪い魔女を殺すことと引き替えに、願いを叶える『オズの魔法使い』のキャラクターに。

広い空の下、屋上にしか居場所のない私たちは、自分に欠けているものを手に入れる。

冬オズ、の本編「[こうして彼は屋上を燃やすことにした](#)」もよろしくお願ひします。

[ブログ／赤色ブランチ](#)

[Twitter](#)

【赤ずきん喫茶】

割れんばかりの絶叫だった。

こういうお店というのは大抵「いらっしやいませ、ご主人様」と迎えられるのだと構えていたから、ドアを開けた瞬間に始まった少女たちの絶叫には面食らった。カランカランと鳴るドアベルを合図としたかのように、ウェイトレスたちは店の奥へ散り散りに逃げてゆく。

ぽつん、とほったらかされた俺は勝手が分からず、しばらく入り口に立ち尽くしていた。

「あ、あの……いらっしやい……ませ。オオカミ様」

オオカミ様？

怯えるようにレジカウンター下から頭を出した女の子が、恐る恐る俺に話しかける。赤い頭巾に丸眼鏡。幼い顔立ちをした小柄な少女は、上目遣いで質問する。

「お一匹様……でしょうか……？」

おいっぴきさま。ああ、客はオオカミ、という設定なのか。

それからカウンター席に案内された。店内は一般的な喫茶店よりも一回り小さいくらいのワンホールで、男性の単独客が三名、ほどよく距離を保って座っていた。天井や窓枠には作り物の蔦が絡まり、同じ蔦から苺、キウイ、ひめりんごなどが節操なく実っている。

俺がドアを開けたときのパニックは収まったらしく。ウェイトレスの女の子たちは辺りをうかがうように姿を現し、おどおどしながら給仕活動や客の話し相手などを再開した。彼女たちの衣装は皆、赤い頭巾にバスケット。身長制限でもあるのだろうか、一様に小柄で華奢な体つきをしている。

席に座り、この店のコンセプトを考えた。`メイド喫茶、にメイドがいるように、ここ`赤ずきん喫茶、には赤ずきんちゃんがいるようだ。客は`ご主人様、ではなく、`オオカミさん、らしい。まったく、よく考える。半ば呆れながら、机上に立て掛けられたメニュー表を手取る。

まあ予想はしていたが、やはり高い。たかだかオムライスで1000円。ケチャップを使い目の前で文字を書いてくれるサービスというのが+200円。女というのはしたたかだ。恋愛感情をちらつかせてそれをお金に換える。ケチャップで文字を書くだけで金が貰える、自分にはそれくらいの価値があると思っている。

俺は女性のそういう態度に辟易していた。そもそもこの店を訪れたのだから、女に振り回されてしまった結果と言えよう。

「また機会があったらね！」

さんざん奢らされたあげく、次のデートを提案すると彼女はそう言って笑った。`また機会があったらね、便利な言葉だ。それが遠回しに拒否されていたのだということを、俺は今日初めて知った。

何とかこじつけたデートの待ち合わせに、彼女は来なかった。やけを起こした俺は時間と金を持って余し、ふと目に付いた`赤ずきん喫茶、なるもののドアベルを鳴らした。こういう店は初め

てだった。傷ついた心を癒やしてくれるなら何でもいいと思っていたが、やはり一度芽生えた女性に対する不信感はなかなか拭えないようだ。

赤ずきんたちの一挙手一投足がやたらわざとらしく感じられる。隙あらば男たちから金を摂取しようとしているのが丸わかりで、萎えてしまう。

視線を落としたメニュー表。粗探しはそれなりに楽しかったりする。

ゝ赤ずきん農場直送☆アンナおばあちゃんの新鮮やさいスティック700円、

ゝ隠し味はしぼる前のキッス☆果汁100%毒リンゴジュース600円、

そんなドヤ顔で☆を散らされたってまず「アンナおばあちゃん」を知らないし、毒リンゴに至ってはもはや赤ずきんですらない。苦笑しながら視線を滑らせていくと、一番下に気になる丸文字を見つけた。

ゝオオカミさんのお肉450円、

肉だけが、極端に安くないか？ ジュースが600円もする空間で、なぜ肉が450円なんだ。そもそも「オオカミの肉」だなんて日本で食べられるものなのか？

俺は無難にオムライスを注文した。

料理をトレーに乗せて運んできた子は、俺に怯えながらそれをテーブルに置くと震えた声で尋ねてきた。

「あ、あの……何と、書きました、あ、ごめんなさい」

言葉を噛むと顔を真っ赤にして言い直す。

「……何と、書きま、しょうか」

「……いや、何でもいいですよ」

適当に答えると、赤ずきんは困惑の表情を浮かべて視線を泳がせた。

日本人ではあるのだろうけど、彼女にはどこかヨーロッパの少女のような可憐さがあった。肩を覆うポンチョと色がお揃いの赤頭巾からは、透き通る様な金色の髪が覗いている。華奢な指先や首筋は何年も太陽の光を浴びていないかのように白く、汚れを知らない少女のような甘さを感じさせた。青色の瞳が困惑に濡れる様にはどこか嗜虐性を刺激され、赤ずきんを襲うオオカミの気持ちが分からないでもない。

彼女はトレーを脇に置くとオムライスを手元に寄せ、バスケットからケチャップを取り出した。その爪先は薄桃色で、マニキュアさえしていない。

手持ちぶさたとなった俺は何か喋らなくてはと、傍らの彼女を見上げる。

「……変わったお店ですね。赤ずきんがモチーフなんだ」

「あ、えと……。はい」

恥ずかしいのか、もじもじと俯く赤ずきん。俺の視線から逃げたいけれど、ケチャップで文字を書く作業を続けなければならない、その板挟みに耐える少女は可愛い。漫画であれば頭から

汗マークがぴよぴよっと飛び出していることだろう。しどろもどろな彼女をもっと虐めたく思い、敢えてその表情をじっと見上げた。

「いろいろこだわってるんですね。メニューとか。その怯えた仕草も上手だなんて」

「え、演技なんかじゃないです……！」

「そういえばさ、メニューで`オオカミの肉、ってあったけど、本物のオオカミ？」

びくり、と少女の肩が跳ねた。下唇を柔らかく噛み、俺を見ないように必死に視線を逸らしている。

「本物……です」

「……？」

まあ店員さんなら、そう答えなきゃプロ失格だろう。その回答は想定の内だが、不思議なのは彼女の挙動の方だ。さっきよりもさらに、怯えている様子。

ちら、と彼女がキッチンへ一瞥したのを、俺は見逃さなかった。反射的にその視線を追う。さ、と何者かが隠れた。

「え？ 今誰かいた？」

「……！ いません、誰もいませんから」

トレーを胸元に抱き、深くお辞儀をして少女は駆け足で去っていった。一体何に怯えていたのか……？ あれは俺に、と言うより他の何かに怯えていたような……。

スプーンを持ってオムライスに視線を落とす。瞬間、背筋が凍った。

オムライスに書かれた文字はたった三文字。

「逃 げ て、

思わず立ち上がった俺に、他の赤ずきんが恐る恐る声を掛ける。

「お、オオカミ様……？ 何か……？」

「い、いえ！ 何でも……！」

慌ててオムライスをスプーンでぐしゃぐしゃに潰し、口の中へ掻き込む。

オオカミ、様……。客をオオカミと呼ぶシステム。怯えた少女。`逃げて、の意味。安すぎる肉の正体。脳内でパズルが組み上がる。何よりさっきキッチンに一瞬だけ見えた、あの大男の姿。あれは、あの格好は――。

オムライスを乱暴に口に掻き込みながら、辺りに気を散らした。さっ、と柱の向こうに消えた影。――いる！

咄嗟に真後ろを振り向けば、側に立つ赤ずきんに夢中で何かのファイルを広げ見せているための客。その後ろに猟銃を構えた――さっ、と隠れる髭男。俺の視線に気付いたのだろうか。あの客の後ろの、不自然に積まれた段ボールの中にもいるぞ！ 羽根付きのハットに深緑のベスト。やっぱり、この店の至るところに猟師がいる！

カウンターを挟んで、俺に警告をくれたあの金髪の赤ずきんが青色の瞳を濡らしてこちらを見ていた。君は、俺を助けてくれようとしているのか……？

「お、美味しいですね、オムライス」

「そ、それは良かった……です」

米粒まで掻き集める時間は惜しい。俺は一気に水を飲み干し、最後の一口を流し込む。

そしてカウンターの向こうにいる彼女にだけ聞こえるよう声を潜めた。

「ね、ひとつ訊いてもいいかな……」

「……」

少女は何も答えない。しかしさっきと違うのは、彼女は視線を逸らさなかった。怯えた瞳はそのままだに、その美しい虹彩は俺を見返していた。

「どうして君は、ここで働いているの？」

「……」

少女はやはり、何も答えない。ただほんの一度だけ、瞬きをした。

「……もしかして無理矢理、とか仕方なく、とかそういう……」

桜色の唇が開いた。何かを言おうとした。しかし彼女が、言葉を紡ぐことはなかった。目を伏せ、それからやおら首を横に振るだけだ。

「……帰るよ。会計お願い」

レジまで送ってもらった。会計を済ませ、おつりを渡された時に細く、白すぎる指先が触れた。誰かに見張られているのだろうか。彼女に自由はないのだろうか。今しかない、と思えた。今が彼女を救い出す最後のチャンスだと。

「一緒に逃げよう」

その手を取り、赤ずきんの青色の瞳を見つめた。沈黙は一瞬。俺の手を握り返し、彼女は初めて、微笑みを見せる。

「あ、はい。また機会があれば」

「行ってらっしゃいませーオオカミ様ー！」

「またお越しく下さい、オオカミ様ー！」

カランカラン、とドアベルは鳴る。たくさんの赤ずきんたちに見送られ、俺は喫茶を後にした。

眩しい太陽と、街中の喧騒。行き交う車。やかましい雑踏。あ、そうそう、思い出した。ここ日本じゃん。何だよ、一緒に逃げようって。死にてえ。

「機会があれば、便利な言葉さ。」

女ってのは！ したたかで、残酷で！ 演技がうまくて！

でもそれ以上に、男ってのはバカなのだろう。「二度と来るものか」などと呟きながら、赤のポンチョから覗く白い肌を思い出し、舌なめずりした自分に気付いた。

【うんこの話】

「ぎげやがってっ……！」

けんかつ早い栗どんは、あぐらをかいた膝を叩き怒りを露わにした。床に伏せるカニどんの枕元でのことである。

「カニどんしっかりして……」と蜂どんは羽を震わせ、「鬼畜っ……」と寡黙な臼どんも巨体を揺らし鼻息を荒くする。

意地の悪いサルどんが、気弱なカニどんに渋柿をぶつけたのだ。集まった仲間たちの怒りは最もだった。

「騙されたおらが悪いだぁ……」

今にも消え入りそうなカニどんの言葉に、仲間たちは益々胸を熱くする。

「そんなことないよカニどんっ！」

「ちょw カニどんww 泡拭け、泡ww」

部屋の隅に笑い声を聞き、栗、蜂、臼の三人は揃って振り返った。

牛のフンが落ちていた。

「ちょww こっち見んなしww」

「……あ、彼は牛のフンどんです」

カニどんが布団の中から、もじもじと説明した。

「牛の……何て？」

「フンどんです……」

三人はその紹介を聞いて始めて、うんこが喋っていることに気付いたのだった。

牛のフンどんは、生まれながらにしてうんこであった。

外国のカエルの様に魔法にかけられたわけでも、醜いアヒルのように変貌する将来があるわけでもない。正真正銘、生涯かけて、牛のフンであった。

しかし彼は、泣かなかった。

「ちょw うんこてww 悲惨ww 何で生まれたの俺www」

彼の最たる不幸は、その環境にあったのかも知れない。例えば、牛糞の村、などで生まれ育ち、一生を村の内側で過ごすことができたなら、自身の奇異に気付くことはなかったのかも知れない。尻の形の良い嫁フンを貰い、可愛く元気な子フンを成す幸せもあったのかも知れない。

しかし悲しいかな、そんな村など無かった。

喋る牛はそこそこいたが、喋る牛糞は彼以外にいなかった。

そもそも牛糞が喋って良いはずがなかった。自我を持って良いはずがなかった。「おーい、うんこ」などと呼ばれても立腹する道理さえ無いのだ。だって、うんこなのだから。

それでも、彼がいじけることは一度もなかった。

「ちょ、うけるww 何で俺作ったの神さまwww 寿命も繁殖方法も分かんないんだけどww

俺の生きてる意味ってなにwww」

牛のフンは天空を見上げて考えた。意味を。生まれたことの意味を。そうして他人に親切になった。畑仕事を手伝うこともあったし、便所掃除なども買って出た。

しかしどれも違和感がある。「うんこに畑仕事をさせるわけには……」と人の目を気にする百姓もあれば、「うんこがうんこ掃除してる」と笑う童さえあった。

しかし彼は諦めなかった。誰が泣いてやるものか。いじけてやるものか。絶対誰かの役に立ってやる。もはやこれは神さまとの勝負。意地であった。

カニが悪猿に渋柿をぶつけられて重傷――。だからそんな噂を聞けば、誰よりも早く駆けつけた。

サルどんの家にて。フンどんは土間で仰向けになっていた。

しかしじっとしていることが何より苦手なフンどんは、ついつい吹き出してしまう。

「うはww みんな隠れてんのになんで俺だけむき出しww ばれるww」

「おい黙れクソ野郎」すると囲炉裏に身を隠す栗どんから注意され、瓶の中に潜む蜂どんになだめられた。

「……フンどんは大丈夫。ばれることないと思うから安心して」

屋根の上に隠れる臼どんからも、「身も心もうんこであれ」とアドバイスを貰った。

それで慌てて口を押さえる。彼はどきどきしていた。予感があった。みんなで協力して悪猿をこらしめる。俺はこのために生まれてきたのかも知れない。生まれて初めて、誰かの役に立てるかも知れない……！

そうこうしている内にサルどんが帰ってきた。

「さみい、さみい」と秋風に身を震わせるサルどんは土間のフンに気付くことなく、囲炉裏へ直行した。作戦通りである。「今だ！」とばかりに熱で弾けた栗どんはサルどんの鼻っ面に飛び出した。

「ぎゃあああああ！ 熱いっ」

鼻を火傷したサルどんは水を求め、台所の瓶の蓋を開ける。もちろんそこには、蜂どんが自慢の針を尖らせ待ち構えている。「それっ！」

「ぎゃあああああ！ 痛いっ」

尻を真っ赤に腫らしながら、サルどんは外へ追い立てられた。いよいよフンどんの出番であった。心臓の高鳴りを感じながら、フンどんは仰向けのまま両腕を広げた。「さあ俺を踏め！」と。「転べ！」と。しかし。

「――わ、うんこ、ばっちい」

サルどんはびよん、とフンどんを跨いだ。

「……！」

何より焦ったのはフンどんである。自分が転ばせなければ、臼どんがサルどんを潰せない。ま

た役立たずのうんこと呼ばれるのか。何しに来たの、と気まずい空気が流れるのか。それだけは避けたかった。サルさえ転ばせられないうんこに、何の価値があると言うのか……。そんなうんこを、誰が仲間と認めてくれるのか……！

フndonはサルどんを追いかけた。転ばさなければ、転ばさなければ！ その一心で戸口を乗り越え、外へ出た時にサルどんへ追いついた。それはうんこにしてみれば奇跡的な速さであった。が、その懸命さが悲劇を招いた。

サルどんが転ぶ転ばないに関わらず、臼どんはサルどんの背中に落下した。サルどんは潰れる。その足下に滑り込んだ、牛のフンごと。

ドシン、と地響きが大地を揺らし、臼どんの巨体から命からがら這い出たサルどんは、悲鳴を上げて逃げていった。

「もう二度と悪さするんじゃねーぞ！」

這々の体で逃げてゆくサルどんの背中に、栗どんが拳を突き上げて叫ぶ。場は一気に勝利ムードに包まれた。作戦は大成功である。

お互いにハイタッチする仲間たち。ふと、蜂どんが臼どんの足下にうんこを見つける。ペしゃんと潰れたうんこ。動くこと適わないただのうんこ。紛れもなく、フndonだった。

「フ、フndonっ!？」

蜂どんの悲鳴で、栗どん、臼どんもその異常に気付いた。駆け寄る三人に囲まれて、牛のフndonは辛うじて笑顔を作る。

「ちょ……俺、意味ねww 巻き込まれただけ……ww」

何と声を掛けてよいのか。三人は言葉が見つからない。

「テラわろす……これで死ぬっていみふww ……俺の人生無意味ww」

そんなことない、そう言ってやれるほど、三人とも器用ではなかった。実際うんこは必要なかった。うんこが無くても、サルは退治できたのだ。

「俺……ホントはどうでもよかったww 親切とか、誰かのためとか、別にそんなに優しくねえしww ただ……」

ただ、友達が欲しかった。

それだけだった。

汚いと疎まれても、臭いと避けられても、ひとりいじけず誰かと関わろうとしたのはそのためだった。涙を流さないのはそのためだった。めそめそ泣いてる暗いうんこを見てくれる者などいない。境遇を嘆いて憎まれ口ばかり叩くうんこに友達などできない。

そう思ったからこそ、ずっと笑っていたのだ。

せめて笑っていようと。せめて誰かの、役に立とうと。

「ぐは、死ぬww もう死ぬw ……次は、次は虎とかに、生ま……れ……一一」

泣きながら笑うフndonを、蔑む者などここにはいなかった。

カニどんの住む家の庭には柿の木が生えている。赤橙の柿はとても甘く、集う仲間たちの頬を

緩ませた。

木の根元には墓石がひとつ。刻まれた文字は、`友よ安らかに、。

「食べるクソ野郎……うんこが食べれるのかは謎だけだな」

墓前にひとつ、甘柿を放った栗どんはにやりと口の端を吊り上げた。

「……お前が命をかけて守った柿だ」

「おーい、栗どん！ 臼どんが種つまらせて死にそう！」

「おう、今行くぜ」

仲間と呼ばれ、栗どんはあっさり離れて行く。

しかしこの小さな墓石の前には、ひとりでは食べきれないほどたくさんの柿が供えられているのだった。

「ちょｗｗ うっそ！？ 死ねてねえしｗｗ」

墓石と柿の隙間から這い出て、牛のフンはひとり爆笑した。

「てかうんこってどーやって死ぬのｗｗ 俺の役目終わってねーのかよ神さまｗｗ」

こうしてフンどんは、再び自分の生きる意味を探し始める。

遠い農村に桃が流れ着き、その果実から生まれた男子が鬼を退治しに行く――。そう聞いて手助けに旅立つことになるのだが、それはまた、別のお話。

秋晴れの澄んだ空に、うんこの笑い声はいつまでもいつまでも、響いたのであった。めでたし、めでたし。

【冬オズ】

手袋を脱ぐと、凜とした冷たさが肌に触れた。

見上げれば、灰色の空からいつの間にか粉雪が降り始めている。

「不思議だね。どうして雪が降っている最中に歩きながら読書なんてできるわけ？」

「どうして？ 歩きながら他にやることがないからだろう」

並んで歩く彼の、眼鏡越しの視線にわざとらしく大きな溜息をつく。

「君ははホント、`ブリキ、ってあだ名がぴったりだよ。身も心も冷たいの。すごく、すごく」

「.....ふん」

「そうだよ。例え本を読んでたくさんの知識を身につけたとしてもさ、隣を歩く女の子を楽しませる物語さえ知らないんじゃないの」

昨夜より降り積もった雪がブーツに踏まれ、むきゅ、むきゅ、と鳴いている。

まだ誰も通っていないまっさらな道に足跡をつける様は、何となく嗜虐的で愉快だ。

むきゅ、むきゅ、むきゅ。

「.....」

「何で黙ってるわけ？」

「いや、楽しませる.....物語を」

彼が真剣に悩んでいる表情を見せたので、それが妙におかしくて笑ってしまった。

「手、つなごっか」

「俺は冷たいんだろ？ 凍傷になってしまうぞ」

「だから、温めてあげるって言ってんの」

呆れたように、ブリキの口元がほころぶ。

彼が本に葉を挟むのを待って、その手を握った。

「うわ、ホント冷たい。手袋しなよ」

「手袋したら、ページが捲れない」

「超、バカ」

透徹した空気に、吐息が滲んで消えた。

むきゅ、むきゅと雪は鳴る。物語は、続いていく。

自己紹介 　いづみみなみ

はじめまして、いづみみなみです。

普段は電撃大王やその他の媒体で漫画を描いております。

今回は一田さんに誘っていただき、久しぶりに小説を書くことになりました。

つたない小説ですが、少しでも楽しんでいただければ幸いです。

[ブログ](#)

[Twitter](#)

大事に抱えたバスケットには、パンと葡萄とワインが二本。
とても美味しそうだけど、ピクニックに来ているわけじゃない。
これは「おつかい」なのだ。

森をぬけ、草原をひたすら歩く。

目指すは大好きなおばあちゃんの家だ。

まだ大人に成りきっていない私の足に、ろくに舗装されていない道を歩くのは重労働だった。

頭上を飛ぶ鳥が、ぎゃあぎゃあと不吉な鳴き声を上げる。

鳥だけじゃない。

ここは村からだいぶ離れた場所だから、危ない動物がたくさんいる。

そう——他でもないおばあちゃんから教わっている。

例えば狼。

人間を食べる猛獣がこのあたりにはよく出るのだと思い出した瞬間、今まさにどこからか狼が自分を狙っているような気がして、ぶるりと体が震えた。

「狼」に出会ったら、自分がどうすればいいのか考えて、唇をかむ。

幸い周囲に狼の気配はなかったけれど、とても恐ろしくて、白い頭巾を深めに被りなおし、道を急ぐ。

おばあちゃん。

優しくて、物知りで、いつも頭を撫でてくれたおばあちゃん。

昔は一緒に暮らしていたのに、病気になって、こんなところに一人で暮らすようになったおばあちゃん。

私は知っていた。

おばあちゃんが森の奥に来たのは、本当は――――一口減らした。

私の「おつかい」も、ただの名目。

働けない老婆はいらない。

食い扶持を増やすだけの小娘もいない。

村は困窮していた。

そう大きくない町だ。

流行病が村を襲った。

偉い人達は自分たちの感染を恐れて真っ先に他の町や村に逃げていき、私達は残された。

人が死ぬだけ死んだ。

やっと流行り病がおさまって、今度は―――凶作が続いた。

限界だった。

流行り病にかかったおばあちゃんはなんとか生き残ったけれど、きっともう長くはないと皆が言った。

兄弟の多い私の家は、生きるために子供を減らすしかなかった。

器量のいい妹と、一番年下の柔らかい髪をした弟が売られていった。

そして私は―――危険な森の奥に住むおばあちゃんの元へ、「おつかい」に出されたのだ。

誰一人帰ってくるとは思っていないのだろう。

死ね。

そういうことだ。

死んで戻ってくるなということだ。

狼にでも食われて、二度と村に戻ってくるなということだ。

いらないものは、捨てられてもしょうがない。

お前はいらないと、共同体からそう烙印を押されてしまった——死んでいくだけの、小娘。
それが私だ。

「お嬢ちゃん」

突然男の声がして、私はびくりと体を震わせた。

そろりと振り向くと、村では見たことのないような汚い服装で、下卑た笑みを張り付かた中年の男が私を見ている。

「こんなところまでおつかいかい？」

男がバスケットの中身から私の体にねっとりと視線を這わせた。

私は理解する。

この男が「狼」。

山賊くずれのならず者。

それが……「狼」の正体。

そうなんだね、おばあちゃん。

「女の子一人で危ねえよお。どうだい、おじちゃんがついて行ってあげようか？」

しまりのない声。しまりのない顔。

手には猟銃を持っていて——私は思い出す。

「狼」に出会ったら、自分がどうすればいいのか。

「ありがとうおじさま。お礼に葡萄を一房差し上げますわ。代わりに、その銃を触らせてくださらない？お父様は危ないからと触らせてくれないの。」

弾丸を発射した銃口が、細い煙を吐き出しているのをぼんやりと見た後、草むらに視線を落とす。

足元には、無残に転がる「狼」の死体があった。

これで――「狼」を一匹仕留めた。

あと何匹の「狼」が森にいるのかわからない。

だけど、これで後から「おつかい」に来るはずの兄弟たちの危険を、少しでも取り除くことが出来ただろう。

そう思うと、小さな胸がほんの少しだけ高鳴った。

やった、やったわ。ちゃんと殺せた。

死体を漁って見つけた銃弾を、同じく「狼」から奪った銃に補充する。

最初の「狼」から武器を手に入れることが出来たのは幸先がいい。

銃は少しばかり重いけれど、油断させて至近距離で打てばなんとか当たることを、私は知っている。

バスケットに忍ばせていたナイフを使うより効率的だ。

ぶるり、と再び悪寒が私を襲う。

まだ終わっていない。

これからだ。

あと何匹いるかわからない「狼」を、一匹でも多く、私は殺さなければならない。

考えに考えて、「おつかい」に行く前に決めたことだ。

これが、私に出来る精一杯。

残された兄弟たちが、どうにか生き延びられますように。

私はこの命を最大限利用する。

ひたすら歩いて数十分、やっと小さなレンガ造りの家が見えた。

扉を開ける。

中に入る。

ベットが、人間一人分膨らんでいて———そこに、干からびた死体があった。

当然だ。

こんな辺鄙なところでろくな食料もなしに、老婆が一人暮らしていける道理がない。わかっていたことだった。

「狼」に荒らされた形跡がないだけでも奇跡に近い。

こみあげてくる嗚咽をこらえながら、おばあちゃんに教えられたとおりに、生き残っていた鳩を籠から出す。

おばあちゃんが可愛がっていた鳩は、久しぶりでも私を覚えていてくれたようだった。

多めに餌をもらっていたのか——後々「おつかい」に出される私達兄弟のために、鳩を残しておいてくれたに違いない。

バスケットの奥から手紙を出す。

村の偉い大人達がしてきたことを、事細かに記した手紙。

村の偉い連中よりも、もっともっと偉い人がいる場所に、鳩は手紙を運んでいってくれるという。

偉い人達というのは、責任というものを果たさないと、死刑になることがあるのだ、とおばあちゃんは言っていた。

もし運がよければ、この国の偉い人が、村の窮地を救ってくれるかもしれない。

だからもしお前がここに「おつかい」にくることがあれば、こうして手紙を出すのだよと、おばあちゃんはそうも言った。

鳩の足に手紙をくくりつけて、空に離してやる。

そうして、私は泣きながらおばあちゃんの死体を家の裏に埋葬した。

涙が枯れて、嗚咽が底をついたとき、私はしばらくはこの家を拠点に「狼」たちを狩ることに決めた。

食料は、バスケットの中にあるパンと葡萄だけだから、大切に食べなければいけない。

近くを流れる川で、魚を釣ることは出来るだろうか？

危険な森で小動物を捕まえて火で炙ることは？

やるしかない。

私は生きる。

搾取され、打ち捨てられて、ただ死んでいくだけの運命なのだとしても――

せめて、命の灯火が消える前に、運命の喉元を噛み千切ってやる。

決意を新たにしていると、とんとん、と扉が叩かれた。

「お嬢さん、こんな場所までおつかいかい？

ここは危ないよ。

おじさんが家まで送って行ってあげよう。

さあ、出ておいで」

ああ―――早速次の「狼」だ。

埋葬している様子を遠くから見ていたのだろうか？

一日で二匹も「狼」を狩れるなんて、なんてラッキーなのかしら！

「ありがとう、親切なおじさま。今行くわ」

そう言うと、私は銃を持ちゆっくりと扉を開けて――

気付くと、白いはずの頭巾が、返り血で赤く染まっていた。

了



初めまして、まるたんと申します。

普段はこんな感じの絵を描いております。

ハッカージャパン（白夜書房・刊）にて、この『オープンレンジは振り向かない』の作画をしております。

原作は一田和樹先生。今回はその縁もあってお誘いいただきました。ありがとうございました。

下記HPにて3話まで無料で掲載しております。よろしければご覧ください。

[『オープンレンジは振り向かない』](#)

久しぶりのリアルタッチな絵が描けました。

また機会があれば色々描かせていただけたらと思います。

[STUDIOM](#)

自己紹介 八川克也

闘えない虚弱プログラマー、八川克也（やつかわかつや）です。

最近三人目が生まれ、てんてこ舞いの日々を送っております。

前回、一田さんに誘われて「セラエノ」に参加させていただいたつなかりで、そのまま今回の「セラエノ2」にも参加させていただきました。SFマガジンのリーダーズストーリィに投稿していた、ということからもわかるように、SF好きです。

最近「子育てSF」に興味があります。今作った言葉ですが。何かしらネタにならないかなと考える日々です。子供にあれだけ時間を割いているのにもったいない！ と思うのです。

それでは、楽しんでいただけたなら幸いです。

[RoomNumber "i"](#)

病室のベッドで目覚めた時、顔に包帯が巻かれていないことに気が付き、蓮華はほっとした。次の競技会までまだ三か月以上ある。顔はなんだかんだ言っても重要なファクターだ。幸い、世間並み以上の顔を持っていて、マスコミにも徐々に取り上げられ始めている。

それから手を動かし、足を動かし――違和感を感じた。

「あら、目が覚めた？」

蓮華の母親が入ってきた。手には花瓶を持っている。

「お母さん、なんか足が変なの」

母親の、台に花瓶を置く手が止まった。

「もしかして、ひどいケガだった？」

母親は、蓮華に背中を向けたままうなずく。

「……そっか」

蓮華はため息をついた。なんとなく予想はしていた。

「リハビリ、しなくちゃね。どのくらいかかるかなあ。次の競技会はダメでも、その次くらいは出られるかな」

母親は、まだ背中を向けたままだ。なんとなくいやな予感を抱いたまま、努めて明るく蓮華は続ける。

「大丈夫、私頑張るから。競技ダンスの世界で一位を取るって決めたんだもん、簡単にはあきらめないからね」

「……ごめんね」

振り向いた母親は泣いていた。そのままベッドの蓮華に覆いかぶさるようにして号泣する。

「ごめんね、本当にごめんね。もうダンスなんて」

「ど、どうしたの、お母さん」

「足は――切るしかなかったの」

「切るって――え？」

「ごめんね、ごめんねえ……」

蓮華にはまだ何が何だかわからなかった。足の感触もまだあった。足首や指を動かす――ふわふわした、実感のない反応。

(幻肢――とか言ったっけ、こういうの?)

泣き止まない母親の背中に手を置いて、蓮華はぼんやりと考えていた。

ビジネス的な意味合いがまったくないといえば嘘になる。仮にも大山は義肢メーカー4 U社のソリューション課長だ。

それでもこの商売の基本は誰かの役に立ちたいという感情。そうでなければ義肢メーカーの、それも個別対応を強いられるソリューション課など成り立たない。

WEBの片隅に乗った小さな記事を元に、大山は情報を集めた。

十七歳の蓮華は競技ダンス界で将来を期待された選手の一人だった。学生大会ならいくつもメダルを取り、インターナショナル大会でも確実にファイナリストになる実力を持つ。その彼女が、交通事故で足を失った。

幸いというべきか不幸というべきか、全身としては恐ろしく無傷で、しかしトラックに巻き込まれた足――右足は膝から下、左足もすねの中ほどから先が失われた。

通常の自律義肢で歩けるようになるのは簡単だ。しかし彼女はダンサーだ。4 U社で開発中の義肢ならどうだろうか、と大山は考えた。彼女を手助けすることが出来るのではないか。

自律制御型義肢――ACAリムは、ナノレベルでの神経接続と、学習チップによる筋電フィードバックで完璧な動作を再現するはずだ。ダンスにも耐えうる、というのがエンジニアたちの見解だった。

本人さえ望めば、これを彼女に提供したい。彼女は以前と変わらない動きを取り戻すことができ、4 U社はその実績を大きく広報できる。

ソリューション課は軽いフットワークが売りだ。すぐさま、大山はエンジニアの水村とともに彼女の病室を訪ねた。

「われわれは、最新の技術を蓮華さんに提供できます」

ベッドの体を起こした蓮華の前で、スレートPCの画面を示しながら、大山は熱心に説明した。

「こちらがその概念図です。生体電流を得るための結合手術のみ必要となりますが――」

「いいの、いくつかのメーカーさんから同じ話を聞きました」

蓮華はあきらめたように首を振った。

「歩けるようになるのは知ってるわ。でも私がしたいのはダンス。どこのメーカーも……」

「できます！」

水村が蓮華の言葉をさえぎるように力強く答えた。蓮華はえっ、というように目を見開いた。「私たちのACAリムはそれを可能にします。私たちはあなたに踊ってほしいと思ってこちらのシステムを説明させていただいています」

「……本当に？」

「もちろんです」

と、大山が言葉を引き継いだ。

「AI制御が、繰り返されるパターンの最適化を行い、それにより専門的な動作を学習します。『体が覚える』という言葉がありますが、われわれは義肢にもその機能を再現させようとしています」

「本当なら、私……でも、あまり高価なものは」

「いえ、費用は全てこちらで負担いたします。もちろん、モニターという形でいくつかの条件はつけさせていただきますが」

それから大山はズボンの裾をめくった。シリコンの人工皮膚をめくった義足があった。

「私の義足で、小規模な実験は済んでいます。問題はありません。蓮華さんには、ぜひ再び踊っていただきたいと思っています」

大山の笑顔に、蓮華は小さくうなずいた。

初期調整で一ヶ月ほどかかり、4 U社は事の次第を発表した。次世代義肢《ACAリム》の発表も兼ねて。

結果は上々だった。4 U社の評判は上がり、関連株も含めて大きく値上がりした。

ただし、蓮華との共同作業はそこからがスタートだった。

違和感なく歩けるまでにさらに一ヶ月を要した。そこでようやく蓮華はダンスの練習を再開することができた。

歩くのに違和感はなくても、やはりダンスの動きには無理があった。通常の歩行にはない、ダイナミックで華麗な足捌きは、神経接続素子からの信号処理と動作への反映が間に合わず、ステップの最中につまずくようなみっともない動きを呈した。

水村の仕事は、かなりの割合でいらだつ蓮華のフォローになった。

「見てほしいの」

ダンススタジオで踊る蓮華を――蓮華の足を見る。通常の歩行や走行に近い動作は完璧だった。課長の義肢に見られるようなぎこちなさはどこにもない。AIがうまく学習処理しているようだった。しかしやはり突発的な動作は間に合っていない。蓮華は足を出したつもりで体の重心を移動するが、義肢が付いてきていないといった印象だ。

「もう大会まで間がないのよ」

水村が蓮華の義肢にケーブルを挿し、データの吸出しと解析を行っている間、蓮華は椅子に座って愚痴タイムだ。

「普段は忘れそうになるの、義足だってことを。でも、踊り始めるとイヤというほど思い出すわ」

「どうしても時間がかかるんです」

水村は申し訳なさそうに答えるしかない。

「ダンスはある程度決まった動きとはいえ、一〇〇パーセント同じ動きではないので、長期に渡って癖をつかむしかないんです。蓮華さんが数年にわたって体に覚えこませたことを覚えさせないといけないので」

「そうかもしれないけど」

と、蓮華はため息をつく。水村は続ける。

「義肢はAIを持っていますが、それはあくまで従属的なものです。蓮華さんの意思を覚えこませないといけないんです。踊るのは蓮華さんなんですから」

「ふ～ん……」

不満そうに答えながら、蓮華は自分の義肢をまじまじと見る。

結果は惨敗だった。

満を持して、と行くはずないことはわかっていたものの、事故からわずか三ヵ月後の大会は無謀といえた。

ファイナリストどころか、一次予選敗退だった。

大山は自分の席で、出掛けに買ったいくつかの新聞を眺める。意外にも大きく取り上げられた記事をいくつか読むが、幸いにして、蓮華と4U社に対しては好意的、または同情的な記事が多い。

大山は安堵した。

事前に必死に止めたのだ。エンジニアたちも大山に抗議に来た。本当に出る気なんですか、絶対無理です、どんなに早くても半年はかかりますよー。

エンジニアからデータの説明を受け、蓮華を説得に行ったが、むしろ逆効果だった。彼女は頑固だった。

それを知り、大山は広報を通して予防線を張った。とにかく、技術的なチャレンジであり、出場は復帰戦ではない、復帰へのひとつのステップである。彼女のプライドを傷つけないよう、しかし結果は出ないであろうことを暗に示し続け、どうにか誰も損をしない結果で持ちこたえた。

「大山さん、何か伝言はありますか」

水村がかばんを抱えて大山の机の前に立っていた。定期訪問に行くところだ。

「いや……しかし、たぶん彼女は大荒れだろうから、フォロー、頼むよ」

「……はい」

水村も苦笑しながら答える。

さっきのアポの電話で、すでに気が重くなっていた。八つ当たりで何かを投げつけられそうな勢いだった。

肩をすくめて、水村は大山の席を離れた。

「そんなに待てるわけじゃない！」

水村が帰ってから、ダンススタジオで蓮華は吐き捨てた。

「みんな、また一段とうまくなってた……。私だけ一回り遅れるわけにはいかないのよ」

しかし、水村も言っていた。必要なのは時間だと。結局のところ、データの蓄積がものを言うのだ。

「どうしよう……」

床に座り込み、膝に顔をうずめながら蓮華は独りごちた。誰か。誰か、何か。

ふと、入院中に来た一人の男のことを思い出した。小さな義肢のベンチャー企業をしていると言っていた。『私どもの会社は直接義肢を提供することはできませんが、メンテナンスなどの相談は個別でお受けできますよ』……。

バッグをあさり、名刺を取り出して電話をした。男が出て、場所を告げるとすぐ来ると言って電話は切れた。

蓮華は男が来るまで躍ることにした。

もう夕方だ。スタジオには夕日が入り、薄暗くなり始めている。しかし蓮華は明かりをつけずに踊ることにした。そんな気持ちだったのだ。明るい中でより、暗い中で踊るほうが、今の気持ちにぴったりだと思った。

本来はペアと踊る。しかし今日は水村が来る日だったから、ペアの男性は呼んでない。普段はドレスで隠れ、はだけでも精巧な人工皮膚で覆われる義肢も、データを取るときだけは金属をむき出しにしなければならない。蓮華はそれが嫌で、メンテナンスの日は一人でステップの練習を繰り返していた。

日が沈み、暗い影となってスタジオで踊っていると、不意に明かりがついた。

入り口を見ると、男性が立っている。

「どうかされましたか。弊社でお役に立てることがあれば、なんなりとお手伝いしますよ」

大山や水村とは違う、少し怪しい雰囲気のある笑顔を見ると、蓮華はむしろ頼りになるのではないかと感じた。

すでに二回、定期メンテナンスの訪問を断られていた。

「一応、体調不良ということになっているんですが」

水村の言葉に、大山は顔をしかめた。

「代わりの日程は」

「都合の良い日を聞くのですが、どうも流されてしまう感じで」

「モニター契約でこちらの定期的なメンテナンスを受けてもらうことにはなってるからな」

「申し訳ないんですが、大山さんから一度連絡してみただけませんか」

「わかった、今から連絡してみよう」

大山が電話を取り上げたとき、ソリューション課の社員が小走りでやってきた。

「大山さん、あ、水村さんも、動画、見られました？」

大山と水村は顔を見合わせる。

「何の」

「蓮華さんのです、共有動画サイトに蓮華さんのダンス動画がアップされてるんです。たぶんいつものスタジオでしょうけど、この間の大会の動きとは比べ物にならないほどうまくなってるんです」

大山は急いでサイトにアクセスし、動画を再生させる。水村も覗き込む。

この間の大会と同じ曲、同じペアだ。しかしあのときのような無様なステップではない。

流れるようにたおやかな動き。計算されつくした足捌き。

思わずほう、と声が漏れてしまうほどのダンスだ。足を失う以前の蓮華よりうまくなっているかもしれない。

「どういうことだ」

動画の最後には、ちらりと4 U社の義肢を映している。事故前の映像ではないということだ。

大山は手にしていた電話で蓮華に掛ける。コールは鳴るものの、出そうな気配はない。

「直接行こう。水村くん、大丈夫か」

「はい、メンテナンスPCだけ持ってきます」

水村は席に向かい、大山は壁のコートを手に取る。

面倒なことにならないければいいが。どちらもそう思った。

『契約違反——法務が出てくるほどになると面倒だな』

『あれはACAIRIMの動きじゃない。何が起きたんだ』

男の言葉に嘘はなかった。

スタジオの中で、蓮華は滑らか、かつ大胆にステップを踏んだ。一連の動作が終わったタイミングで、入り口のドアが開いた。

「あら、大山さん、水村さん」

「ご自宅でこちらと伺ったもので」

蓮華の笑顔とは対照的に、大山と水村の表情はこわばっている。

「すみません、連絡もせずに。でも、どうです、きちんと踊れてますよね、私」

「その件で、お話を」

大山はスレートPCを指し示す。蓮華の動画だ。

「この動画、なぜアップされました？ 広報はわれわれの仕事です。勝手なことをされては困ります」

「でも、4U社を悪く言うようなものじゃないわ」

「何をされたんです、ACAリムに。あれほど急激にAIの学習結果が反映されることはないはずです」

水村も前が出る。

「それにメンテナンスを断られていたのはなぜです？ ——いえ、今さら何でも良いです。とりあえず、データを取らせていただけますね」

「お断りします」

予想しない言葉に、大山も水村も動きを止めて蓮華の顔を見た。蓮華はにこやかなまま、しかし断固と言い放った。

「今、別の業者の方にメンテナンスを依頼しています。私の足をここまで踊れるようにしていただいたのは、その業者の方です。モニター契約も、違約金を払って修正させていただきたいと思っています」

大山も水村も対応に追われた。

その間も蓮華は自らのダンス動画をアップし続け、健在をアピールした。動画では4U社に触れなくなっていた。

メディアの取材は、蓮華側はノーコメントを通し、4U社もあいまいな受け答えでかわし続けた。

しかし二週間が経ち、4U社の社内で対応方針が決まったころ、蓮華は突然動画のアップを中止した。

まずは動画のアップを止めさせることを目的にした対応は出端をくじかれ、数日の猶予が設けられた。蓮華側から何らかのアクションがあるのではないかと思われたからだ。

果たして、大山に連絡が入った。いつも通り、大山は外線の電話を取った。

「はい、4U社です」

『ご無沙汰してます、蓮華です』

「蓮華さん？」

『すみません、一度お会いしたいのですが……』

蓮華の声は、少し前に会ったときとはまるで違い、覇気がなかった。それでいて、はっ、はっ

、と息を切らしたような小さな息継ぎが聞こえる。大山はいぶかりながら承諾する。

「わかりました、ご自宅へ伺えばよろしいですか」

『いえ……済みませんが練習スタジオのほうに』

それで電話は切れた。

大山と水村はスタジオに向かった。社用車を運転しながら、水村は大山に尋ねる。

「息を切らしてたんですか？ 踊りながら電話してきたってことですかね」

「そもそもそんなことをする意味がわからん」

「ACAリムは有効に使ってるから契約違反じゃない、みたいなことをアピールしていたとか」

「まさか。何にしても、きちんと連絡が付いた以上、会社としては今後の契約の形態——破棄なのか変更なのか、改めて確認することになるな」

スタジオの前では、蓮華の母親が待っていた。げっそりとしたやつれ具合に、二人ともぎょっとした。

「大山さん、ご足労ありがとうございます……」

「お世話になってます。蓮華さんは中ですか」

「ええ、はい……娘を助けてくださいい」

大山は急に母親にすがりつかれ、戸惑った。

「ちょっと、どうされました」

「罰が当たったんです、でも娘はちょっと天狗になっただけなんです、どうか助けて……」

大山は母親をなだめながらスタジオに入った。

そこには踊る蓮華がいた。

いや、どう見てもその動きは『踊らされて』いた。勢い良くステップを踏む下半身とは対照的に、上半身は脱力し、ただなすがままに振り回されていた。

「……大山さん、水村さん、来ていただけたんですね」

「蓮華さん……どうされました。どこか座って——」

「座れないんです」

蓮華は顔をゆがめた。

「足が止まらないんです。足が勝手にステップを踏むんです」

「――A C A I が？」

水村はうなった。

「原理的には……神経接続してるし、フィードバック機構があるから大腿二頭筋やぎりぎり大殿筋まで逆制御できなくはないが……A I は基本チップレベルで禁止してるはず」

「蓮華はだまされたんですよお、だからやめておけて私は言ったのに……」

泣き崩れる母親を見たせいか、逆に蓮華は少し落ち着いた。

「ごめんなさい、私……別の業者にメンテナンスを頼んだって言ってましたよね。その業者の人が、『そもそもA I に覚えさせればいいんですよ』って」

言いながらも、蓮華は踊り続ける。

「『完璧なステップをA I に教え込みましょう、蓮華さんは力を抜いて足が動くように動けば大丈夫です』……あまり深く考えませんでした。その人は義肢の中をいじり、ケーブルをつないで何かやってみました。『制限チップもはずしましたし、プログラムも上書きしました。後はいくつかステップのデータを取って、修正しながら書き込むだけです』」

踊りながら一気にしゃべったせいか、蓮華は少し口を閉じた。はっ、はっ、と息継ぎと、母親のすすり泣きだけが聞こえる。

「それから、何度か曲ごとにデータを取りました。それを修正して、完璧に踊りこなして撮ったのがあの動画です」

「違法改造だ！」

水村は声を上げた。

「何でそんなことを。データの蓄積が全てパーだ！ いや、そんなことより」

「水村さん、足を止めてください……」

「逆制御をかけたってことは神経接続が……足の神経が焼き切れて……」

水村はしぼり出すように言葉を出す。それを聞いて、蓮華は寂しそうに笑った。

「痛いんです、義肢をくっつけてるところが。だからそうかなって。ちゃんと自分で踊らなくちゃだめだったんですね。足に踊ってもらえばいいだなんて、何でそんなこと思っちゃったんだろ」

大山が、母親の手をとって立ち上がらせた。

「お母さん、手伝ってください。蓮華さんを寝かせて、押さえましょう。水村くん、義肢の切り離しはできるか」

「できます。できますが……プログラムも書き換えられてるので神経接続が止められないかと。強制切断は……」

「お願いします、痛くても我慢しますから」

「……わかりました」

暴れる下半身を押さえ込むのは容易ではなかったが、どうにか蓮華をうつぶせに寝かせ、水村はかかとの人工皮膚を切り裂いた。小さなスイッチボックスを開けると、ジャンパースイッチが三つ並んでいた。

「強制切断します。激痛だと思いますが……」

「わかりました」

「ジャンパーは各足ごとに三つです。それぞれ三回、我慢してください。それでは抜きます」
プライヤでスイッチを挟み、水村は一気に引き抜いた。

動きを止めた足を取り外す。人工皮膚で覆われたそれは、まるで切断された本物の足の様でもあった。踊り続けた、足。

蓮華が、

「なんだか足だけが独りでまた踊り出しそう……」

とつぶやいたが、もちろんそんなことはなかった。

*

4 U社は、次世代義肢のモニター実験について、全体的には成功だが解決すべき問題点が多いとして商品化のスケジュールを先延ばしした。蓮華の結果について、いくつかの事実は公表され、またいくつかは隠蔽された。

蓮華は義肢の接続に関する外科手術を改めて受け、通常の自律義肢をつけることになった。もちろんダンスを踊るには機能不足だし、足の神経も回復するまで何年も要するだろう。競技ダンスは引退するしかなかった。

「でもいいの、私、ダンススクールを開くわ」

自律義肢の調整で最後の訪問になった日、蓮華は大山と水村に話した。

「できるだけ格安で。ボランティアでもいいんだけど、他に仕事ができるかわからないもの」

蓮華は二人を笑顔で見送り、母親はぺこぺこ頭を下げ続けた。

帰りの社用車で、大山はずっと思っていたことを水村に話した。

「なあ水村くん、技術部長に進言してくれ、A C A Iの名前を変えようって」

「何ですか」

「気にならんか？ A C A I——赤い、って読めるんだぞ。今回のこともあるし——」

「もしかして童話の『赤い靴』ですか？ 結構ひどい話の」

「技術部はどうでもいいだろうが、営業しづらい」

「たまたまなんですけどね……」

大山はイメージの問題を説き、水村は非科学的な上に靴じゃないことを主張し、二人は4 U社へと戻っていった。

井上です。前回に引き続き参加させて頂きました。

前はSFマガジン リーダーズ・ストーリィの選評作を中心に、既作のみで構成しました。

公開後に同アンソロジーが好評だと聞き、どうせなら新作を書き下ろすべきだったと悔やんだものでした。

第2弾となる今回は、童話を元にした物語というテーマでしたので、そんな都合の良いストックを持ち合わせていない自分は、ころおきなく新作に取りかかることができました（笑）。

このお話のベースは浦島太郎です。

アンソロジーの公開が2月ということで、憧れのキャンパスでの新生活に向けて頑張る受験生へ、自分なりのメッセージを込めたつもりです。

親元を離れて初めての一人暮らし、しかも数年後に帰郷することを前提とした新生活というのは、浦島太郎が竜宮城で過ごした日々と通じるものがあるような気がしてなりません。卒業し、地元へ戻ってきた際の安堵感と、同時に沸き立つ一抹の寂しさ。思い返せば夢のようだった学生生活、そして外の世界を知って初めて感じる、これまで慣れ親しんできたはずの地元と自分との間に生じたギャップ。……などというこじつけのくだりは、書き上げてからでっち上げました。すみません。

主にSFマガジン リーダーズ・ストーリィに投稿しています。入選15回。

昨年より一田さんの影響でTwitter小説を始めました。そのうちの1本が、学習研究社より刊行された「3.11 心に残る140字の物語」に集録されています。どこでどう繋がるか分かりません。面白いものですね。

ブログ [Kinako-Nejiri](#)

リンクフリーです。[Twitter](#)のフォロー共々、お気軽にどうぞ。

以下に記す内容は、R大学民俗舞踊愛好部の設立に関するあらましである。創設メンバーであるU氏の回想を軸に他のサークルメンバーからの証言を補足し、電子書籍として纏められた資料としては初のものとなる。なお、昨今における個人情報保護の流れに則り、一部匿名を用いていることを予めご了承願いたい。

R大学民俗舞踊愛好部の歴史は今を遡ること30年、当時現役高校生であったU氏が同大学の門を叩いたことから始まる。

U氏には悩みがあった。他ならぬ、進路にまつわるエトセトラである。

2月、当年18の齢を重ねていたU氏は高校生活最後の春休みを迎えていた。4月には上京し、新たな大学生活を満喫する腹積もりであるU氏であったが、反面、生まれ育った故郷を離れるにあたって1つだけ心残りがあった。青春時代に愛を育み、将来を約束した女性の存在であろうか。

おそらく否であろう。基督教の思想に教育の根底を汲み、敬虔な私立中高一貫教育の男子校で青春のすべてを過ごしてきたU氏にとって、愛を育むべき女性など望むべくもなく、男性に至ってはまかり間違っても育むことのないよう、十分に注意を払ってきたはずである。U氏は慎重かつ気の小さい男である。昨年や一昨年のこの時期、恋人間において特別な意味を持つ甘い西洋菓子が男子校内においても出没したという噂は氏の耳にも届いていた。美男ではなくとも身に危険が及ぶ可能性がないとも限らぬことを、彼は6年間の学園生活の中で学んでいたに違いない。

スッポンモドキをご存知だろうか。

ウミガメの体に豚の鼻を取り付け、スッポンの皮膚で覆ったような造形の生物である。インドネシアやオーストラリア、パプアニューギニアに生息し、甲羅の長さは最大で70センチに達する。ブタバナガメという、本人にとっては大変迷惑であろう別名が付けられており、動物界脊索動物門爬虫綱カメ目スッポンモドキ科スッポンモドキ属に分類されている。

18歳のU氏の心を悩ませていたものが、まさしくそれだったのである。

U氏が高校を卒業するまで暮らしていた街には1軒のペットショップがあった。U氏は物心ついた頃から、そこで動物たちを見るのが楽しみだったそうだ。店の入口に鎮座する大型水槽の中を優雅に泳ぎ回るそのカメを眺め、そして奥の犬猫コーナーへと足を運ぶ。そして帰り際にもう一度その優雅な舞を眺めるのだ。U氏にとってスッポンモドキはペットショップの看板であり主であり、大仰な言い方をするのならペットショップそのものであった。やがてU氏がスッポンモドキに魅了されていったとしても何ら不思議なことではない。

「買えないのではない、飼えないのだ。だから諦めなさい」

U氏を敬虔な中高一貫男子校に通わせた厳格な父はそう諭した。事実、U氏の実家はペット禁止の賃貸マンションだった。大手を振って飼えたのはせいぜい金魚程度で、ハムスターあたりが黙認される限界である。それ以上の動物は犬猫と同等とみなされ、隙あらば近隣住民によって速やかに不動産屋に通報される。

「むしろ変温動物のカメのほうが、恒温動物であるハムスターより金魚に近いのではないか」

小学生だった頃U氏はそう反論したが、当時既に甲羅の長さが30センチを優に超えていた、かのスッポンモドキにその理屈が通用するはずもなかった。

しかしU氏は諦めなかった。暇を見つけてはペットショップに通い、夏休みの自由研究は毎年スッポンモドキの観察記録を提出した。長年に亘るつづさな観察により、U氏はペットショップの主と化しているその個体が雌であることを突き止めていた。だから、というのを理由として挙げるわけにはゆかないだろうか（註1）。自然の摂理に反して詰め込まれた6年間の男子校生活で失われた女性との愛の代償を、スッポンモドキの雌で補おうなどという汚れた心があったわけではない。U氏は純粹に、彼女の将来を案じていたという。大学進学で地元を離れる4年間に、愛情の欠片すら持たぬ小金持ちの慰みにされてしまうのではないか。また誰にも買われず、この狭い水槽の外の世界を知ることもなく、その命を終えてしまうのではないかと案じ、心を痛めていたというのだ。

ペットショップに通い始めた当時まだ小学生だったU氏にとって、12万円の値札は天文学的な数字に思えたことだろう。しかしその頃の彼は上京を間近に控えた18歳。愛を育む相手のいない青春の全てを適度な勉学とアルバイトに傾けたU氏にとって、それは出せない額ではなかった。さらに3月、彼女の値札は4万円にまで下がっていた。もはやU氏が取るべき道は一つしかなかったのである。

※

「それで、君はそのスッポンモドキとやらを本気でこの部屋で飼育するつもりなのかい？」

ひょろりと背の高い、ドレッドヘアの優男が浴室の前で腕組みをして問うた。U氏の4年間の大学生活に多大な影響を及ぼすこととなるイリオモテジマ先輩である（註2）。

U氏の地元ではまだ蓄が硬かったはずだ。東京では早くも散り始めた桜が春風に乗り、陽に焼けた畳の部屋に舞い込んでくる様子を、U氏はこれから始まる新生活への夢と希望に重ね合わせていたに違いない。

上京して数日後。同じアパートの階下に住む男が大学の先輩だと知ったU氏は、イリオモテジマ先輩を自室に招き入れた。家賃2万円風呂無しの1階に対し、U氏が入居した2階は2万5千円と若干高額ながら風呂付きである。先輩が物珍しげに風呂場を覗き込んだのも自然な流れといえよう。

「勿論、そのつもりです。彼女のためなら勉学も合コンも慎み、バイトを増やすことも厭いません」

遊泳能力に長けているスッポンモドキを飼育するにはそれ相応の水槽が必要となる。しかしこれからの4年間、仕送りとアルバイトで生計を立てようとするU氏にとって、そのような代物はいそれと手が出るものではない。そこでU氏は、浴室をまるごと彼女に捧げる作戦に出た。仕送りでまかなえる範囲内で風呂付きの部屋を借りれば、水槽代が浮くという算段である。

「僕も彼女といつまでも一緒にいられるとは思っていません。いずれ彼女がこの浴槽から外の世界に泳ぎ出す日が来たら、彼女の意思を尊重したいと思うのです」

そう言ってU氏は窓の外に流れる隅田川に目を向けた。

U氏が彼女を引き取った本来の目的は、彼女をペットショップの狭い水槽から世界に解き放してやることである。より狭い浴槽の中で不自由な日々を送らせることはU氏の本望ではない。2人きりの蜜月のこの期間は、お互いにとって過ぎたる青春のささやかな1ページとなるのだ。U氏はそう自らに言い聞かせていたそうだ（註3）。

「しかし君、スッポンモドキは本来日本には生息していない外来種だよ。川に放すのは感心しないねえ」

U氏は慎重かつ気の小さい男である。加えて少々詰めが甘いことは否めない。子供の頃、地元の小川でアメリカザリガニを当たり前のように見掛けていたU氏にとって、外来種による生態系の破壊なぞという事情ははなから頭に入っていなかった。

「……それなら、飼えなくなったら動物園に引き取ってもらいます。上野動物園には彼女の仲間が飼育されていると聞きました。それまでは僕が責任を持ちます」

6年間に及ぶ男子校を脱して掴んだ大学生活が夢ならば、幼少の頃から店頭で飽きずに眺め続けていた彼女との生活も夢に違いなかった、とU氏は後に熱く語ってくれた。

「そうかい。それなら僕がこれ以上口を出すことではないけどね。でも、その気になったら遠慮無く相談してくれよ。部屋にいなけりゃ、大学では僕は大概そこにいるから」

そして親切な先輩は1枚のピラを置いて去って行った。

入学直後のU氏は、ご多分に漏れず否応なしに各サークルの新入部員勧誘騒動に巻き込まれた。最終的にU氏が向かった先は、旧体育用具室をロッカーで半分に仕切った3畳ほどの小さな部屋だった。中を覗き込んだU氏はまず高さ3メートルほどのトーテムポールと見つめ合ってしまう、少なからぬ後悔の念を抱き目を逸らしたところで、民芸品の山の中からひょいと顔を出したドレッドヘアのイリオモテジマ先輩と見つめ合った（註4）。窓際に貼り付けられた安物のスピーカーからは、小学校時代に音楽の授業で聞いたことのある民俗音楽が流れていたという（註5）。

「……先輩お1人ですか？」

出迎えた先輩の目は、まるでU氏が来ることが予め分かっていたかのようなようだった。

「まあ座りたまえ。珈琲でも飲むか。そうだ、インドネシアの珍しいのがあったんだ。コピ・ルアックって聞いたことはあるかい？」

飲むとも言っていないのに先輩はガリガリと豆を挽き始めた。

「まあ座りたまえ」

座れと言われても怪しげな民芸品に埋め尽くされた3畳間に大の男が2人座れるスペースなど残されていない。U氏は天井から吊された曼荼羅柄のバスタオルを屈みながらやり過ごし、頭上に水瓶を乗せた腰の高さほどの木彫りの人形達を蹴飛ばさないようジャンプしながら奥の電気ポットまで辿り着くと、トーテムポールにもたれかかるように先輩の差し出すカップを受け取った。

「失礼かも知れませんが先輩、ここは何なのですか？」

「なんだ、ビラを読んで来てくれた訳じゃなかったのか。民俗舞踊愛好会だよ。もっとも、これから作るんだけどね」

「すみません。民俗舞踊愛好会というのはどんなサークルなんですか？」

イリオモテジマ先輩は何かのツノで造られたらしきカップをテーブルの穴に差し込むと、一瞬だけ考え込むような仕草を見せてからU氏に向き直った。

「君は海外旅行の経験はあるかい？」

「いえ、残念ながらまだ……」

実際には高校の修学旅行で希望すればハワイあたりには行けたのだ。しかし海外旅行に浮かれるのは馬鹿だとひねくれたU氏は、今こそ日本の良さを再確認すべしとの持論により京都、奈良への国内旅行を選択したのだった。

「恥ずかしがることはない。実は僕もなんだ。飛行機が怖くてね。しかし発想を逆転させてみたらどうだろう？ 海外に行けないのなら、日本に引っ張ってくればいいじゃないか」

「引っ張るって、何をです？」

「海外に決まっているだろう。人の話を聞いているのか君は」

「すみません。美味しいですね、この珈琲」

「原料の豆はジャコウネコの糞から取り出したシロモノなんだけどね」

U氏は危うくトーテムポールに吹き出しかけた。

「おいおい。結構高いんだよ、これ」

それが指すのが珈琲なのかトーテムポールなのか判断しかねたが、とにかくU氏は合点した。この狭い体育用具室が怪しげな海外の民芸品で満たされているのは、目の前にいるこの男の願望充足のためであるのだと。

イリオモテジマ先輩は大仰に手を広げた。

「ここに世界をつくろうと思っている」

「世界？」

この部屋にこれ以上物を詰め込むなど正気の沙汰ではない。

「世界を味わえるようなサークルを作りたいんだ。しかし何でもかんでもというわけにはいかない。世界は広いが部室はご覧の通り手狭だし、僕らが大学にいられる時間も限られているからね。だからまずは民俗舞踊から始めようと思ったんだ」

「どうしてです？」

「踊りは世界の多様性を示すシンボルだと僕は思う。……というのは後付けでね。幼い頃ハワイアンダンスを見て感激してそれでだよ。でもハワイだとメジャーすぎて今更な感じがするだろ？」

「だから最初はポリネシアンあたりからはじめようと思ってさ」

「つかぬことをお聞きしますが、先輩はどこでそのハワイアンダンスを見たんですか？」

「福島に決まってるだろ。浜のほうに温泉施設があるだろう。君はそんなことも知らないのか？」

「……はあ」

「そこで君のスッポンだ」

「スッポンモドキです」

「今、農学部と交渉中でね。上手くいけば旧校舎の一室が借りられる。そこに部室を移して人工池も作ろうと思っている」

「それが民俗舞踊とどう繋がるんです？」

「雰囲気作りは大事だよ。そこで君の力が必要になる」

そこで氏は先輩の策略にまんまと嵌められたことを知った。

かくしてU氏は、R大学民俗舞踊愛好会の記念すべき創設メンバーに名を連ねることとなったのである（註6）。

別れ際、イリオモテジマ先輩はU氏の方をポンと叩いて言ったそうだ。

「ポン子ちゃんによろしくな」

「誰です、それ？」

「君の愛しのスッポンモドキだよ。可愛がっているペットに名前を付けるのはごく当たり前のことだろう」

※

こうして民俗舞踊愛好会の活動は始まった。踊れる者などいないのに舞踊愛好会とは名ばかりではないかとU氏は指摘したのだが、愛好していれば踊れる必要はないのだとの理由でサークル名の変更は却下され、返す刀でU氏は艶めかしい衣裳で火を囲みながら踊る褐色の女性達が描かれたポスターを手渡された。一方でイリオモテジマ先輩は前述のプラン通り、踊りの習熟のためという名目で農学部が使われていない木造の旧校舎を借り上げた。それまで旧体育用具室にあった東南アジアやアフリカ各国の怪しげな民芸品の類を新たな部室に移動させるのみに留まらず、農学部が放置していた温室設備を無断拝借し、それを用いて室内で様々な熱帯植物の栽培を始めたのである。海外を日本に引っ張りたい先輩が目指したのは熱帯のジャングルだった。U氏も自費で熱帯の植物を購入するよう強制され、先輩のポンコツ軽自動車で度々ガーデンショップへと連行された。部屋の中はまるで植物園のように草木が生い茂るまでに変貌を遂げ、そこかしこに飾られた未開民族風の鎗や盾によりその雰囲気は増した。ポスターの中の艶めかしい女性達と男2人の最初の1年間はそれだけで過ぎ去った。

一連の活動により、勉学や合コンを慎むどころかバイトを増やすことも出来なかったU氏だったが、サークルの存在はU氏にとっても悪いことばかりではなかった。最初の言葉通り、室内には水産学部からくすねてきた養殖用の生け簀が設置され、そこがポン子の新たな住まいとなったからである。熱帯の植物が生い茂り、生け簀には豚面のカメ。ブラウン管の小さなテレビ画面からはどこぞの民俗舞踊のビデオが常に流れているという、以後今日に至るまで続くスタイルはここから始まったのである。

これらイリオモテジマ先輩の拘りは愛好会に少なからぬ影響をもたらした。U氏が2年生となった春、入会希望の新入生が複数名現れたのである。しかもそこにはあろうことか民俗舞踊に興味を持った女子学生も含まれていた。中高6年間に加えて先輩との同好会活動に大学生生活の4分の1の月日を費やしたU氏にとって、この出来事は大いなる前進であった（註7）。さらに、発足時に名前が記載されたのみだったタイ人留学生や平目氏もサークル室に顔を出すようになり、愛好会は一気に賑やかなものとなった。

この時期の民俗舞踊愛好会とU氏の様子について、U氏の1年後輩である珊瑚女史は次のように語っている。

「サークル室はまるで熱帯のジャングルでした。活動そのものはイリオモテジマ先輩の主導でしたけど、サークルに対する愛情はもしかしたらU先輩の方が強かったかもしれませんね。なにせ、授業時間以外はほとんどサークル室にいたみたいですから。お昼もそうですし、ええ、噂ではアパートにはほとんど帰っていなかったとも聞きました。外部の人から見ればイリオモテジマ先輩の突飛な行動が目立っていたようですが、U先輩も相当でしたよ。なんか、カメの世話にも熱心でしたし」

このことから、U氏がポン子との関係を他のサークルメンバーに伏せていた可能性が浮かび上

がる。ペットショップの水槽内で生涯を終えるはずだったポン子を自由な世界へ解放とうという大義名分を掲げていたU氏にとって、ポン子との親密性が周囲に知られることは都合の良いこととは言えまい。

U氏はその件について多くを語ってはいない。しかし、次に紹介する愛好会室出火事件でのU氏の対応から、いくばくかの推察をすることは可能である。

瞬く間に時は流れる。U氏が4年生を迎えた秋、ひとつの転機が訪れた。父の死である。進学先の選定において、厳格な父の元を離れたい感情がU氏になかったとは言えまい。地元には翌春に高校卒業を控えた弟がいる。この件が彼の進路に水を差すようであってはならない。母を1人残して家を出る決断を弟に躊躇させないためには自分が地元に戻るべきだと、U氏は決断したという。この3年半の大学生活は実に素晴らしいものであった。イリオモテジマ先輩をはじめ同好会の仲間と過ごした時間はまるで夢のようだった。ポン子も生け簀の中ですくすくと成長し、甲長が50cmを超えるまでになった。毎朝の餌の時間にU氏が手を差し出すと、彼女は前ヒレを水面に出して応じたという。いつまでも手を繋いでいられるような気がしていた、そうU氏が自嘲気味に口ずさむさまが今でもありありと脳裏に浮かぶ。

すぐさま地元企業への就職活動を開始したU氏だったが、同時に力を注ぐべきイベントが間近に控えていた。そう、学園祭である。

民俗舞踊愛好会はその熱帯のジャングルのような雰囲気の評判を呼び日頃から訪問者が絶えなかったが、年に1度の学園祭においての集客力は他の文化系サークルから抜きんでていた。イリオモテジマ先輩主導による施設の造形はもとより、純粹に民俗舞踊に興味を持つ珊瑚女史ら後輩達のパフォーマンスも年々完成度が上がっていた。熱心な後輩達は自費でカルチャースクールに通い、本来の活動目的である民俗舞踊を学んでいた。受講科目の都合でハワイアンのフラから始めたという記録が残っているが、イリオモテジマ先輩が持ち込んだ怪しげな映像資料を参考に、そのバリエーションは年々充実していった。

ここで再び珊瑚女史に登場していただく。

「サークル室は入って奥の壁側の半分のスペースに熱帯植物や置物、それとサークルで飼育していたカメの生け簀がレイアウトしてありました。手前の空いたスペースがダンスの練習場所でしたね。ある日、練習開始より早めにサークル室に着いたので、てっきり誰もいないものだと思って着替えをしていたら、奥の方で物音がするんですよ。カメかなと思って生け簀を覗き込もうとしたら、手前の草むらにU先輩が這いつくばっていたんです。びっくりして叫んじゃいましたよ」

珊瑚女史の談話を紹介するとU氏は懐かしそうに目を細め、いや、あれは全くの不可抗力だったんだよと、繰り返し呟いていたのが印象的である。

ともあれ、U氏の大学生生活の集大成ともいべき最後の学園祭が幕を開けた。普段から十分に展示物として通用するサークル室を誇る民俗舞踊愛好会は、一層に雰囲気盛り上げるため窓全面に暗幕を貼り外光を遮断、ディスプレイされた熱帯植物や怪しげな置物の間には本物の松明をセットした。微かな風に揺られ暗闇に浮かび上がる情景はBGMに流れる各国の民俗音楽と相まって混沌とした雰囲気を醸し出したという。そして手前のスペースで1日に3度、カルチャースクールで腕を磨いた後輩達のパフォーマンスが披露された。

火災が発生したのは日曜日の午後4時頃だった。最後のパフォーマンスを終え、後輩達が着替えのためにサークル室を出たあたりだったと、入場整理をしていた平目氏は証言している。室内に響き渡る絶叫を聞いた平目氏が中を覗くと、1人の客が飛び出してきた。薄暗い室内では椰子の木に立て掛けられていた全長1メートルほどの木の盾が火に包まれており、みるみるうちに周囲の置物に燃え移ったという。

旧校舎は新校舎が建てられた20年程前に本来の役目を終えており、民俗舞踊愛好会を例外とすると、殆どの部屋が倉庫として利用されていた。スプリンクラーも設備されておらず、演出のために照明を遮断したこの時の室内の状況を冷静に判断することは難しい。辺りは騒然となった。

学食で遅い昼食をとったU氏が戻ってきたのはその直後である。状況はともあれ、何が起きたのかは誰の目にも明かである。野次馬の輪をかき分け憤怒の形相で現れたU氏に、バケツに水を汲んでいたイリオモテジマ先輩が叫んだ。

「まだ彼女が中にいる！」

U氏はイリオモテジマ先輩からひったくったバケツの水を頭から被ると、躊躇なく黒煙舞い上がる室内へ駆け込んだという。周囲が呆気にとられた一瞬の静寂の後、イリオモテジマ先輩が部員達に向かって大声で叫んだ。

「みんな、雨乞いの踊りだ！」

着替えの最中に慌てて戻ってきた後輩達は、イリオモテジマ先輩の剣幕に押され、ちぐはぐな衣裳のまま戸惑いながらも入口前でパプアニューギニアの伝統舞踊である雨乞いの舞いを始めた。BGMはイリオモテジマ先輩が床にひっくり返して叩くバケツである。そこへ各々消火器を抱えたタイ人留学生達が走り込んできて、部室に作り上げた密林の夜はたちどころに消火剤まみれとなった。

当事者でもある珊瑚女史は後にこう語った。

「あまり大袈裟なことは書かないでくださいね。ちょっとしたボヤだったんですから。あのときU先輩が助けに来てくれたのは嬉しかったですけど、そうじゃなくても自力で避難は出来たと思います。でも一步間違えれば大惨事ですからね。学園祭は中止になりました。最終日の夕方だったから、後夜祭がなくなった程度で済みましたけど……。私達はその後警察署で事情聴取を受けました。後から聞いた話だと、生け簀のカメに餌をあげたお客さんが亀と握手しようとして松明をひっかけてしまったそうですね。U先輩の落ち込みようは正直見てられなかったです。あの芸を仕込んだのはU先輩ですし、ある意味あのカメが原因だったんですから」

白濁した生け簀からはポン子の亡骸が発見された。火と煙のサークル室に飛び込んだU氏が救出したかったのが珊瑚女史だったのか、それともポン子だったのか、それをU氏に追求することはさすがにはばかれる。

珊瑚女史の証言にもある通り、火災は小規模なもので収まった。この件を機に民俗舞踊愛好会は室内における火気の禁止をはじめ、それまで無許可で使用していた様々な設備の撤去及び許可申請の徹底等の指導を受けたものの、サークルそのものの消滅は免れた。ポン子がいなくなった水槽には他サークルの露天で余ったミドリガメが放たれたそうである。

そして翌春、イリオモテジマ先輩を初めとするサークルメンバーに見送られながら、U氏は大学を卒業した（註8）。ボヤ騒ぎを通じて急速に縮まったことも充分考えられる珊瑚女史との関係についてであるが、筆者がそれとなく話を振っても、U氏は弱々しい笑みを浮かべて首を横に振るばかりだった。

※

足早ではあるが、以上がR大学民俗舞踊愛好会の設立における顛末である。U氏が卒業した春、サークルは部として大学に承認され、民俗舞踊愛好部として正式に発足した（註9）。部長にイリオモテジマ先輩、副部長には珊瑚女史が就任した。以降の同サークルの活躍は周知の通りである。

最後に、本稿の完成を目前にしてU氏が亡くなられたことに対し、深く哀悼の意を表したい。「あの人がいたらね、私の鼻がポン子に似てるから結婚することに決めたんだ。そう話していたんですよ。失礼な話よね。そんなこと言われても嬉しくも何ともないのにね」

本稿の編纂を終え、仏前に報告に伺った筆者の前で、U夫人はそう言って微笑んだ。清々しい表情に刻まれた泣きぼくろが印象的であった（註10）。

……幸せ者め。

仏前でにこやかに笑うU氏の、つるりと禿げ上がった頭頂部を張り倒してやりたい衝動を必死で堪え、筆者は夫人が挽いてくれたコピ・ルアックを一気に啜った。

Fin

（註1）取材中、U氏はことある毎にこの説を否定した。「何も人間の女性に相手にされないから雌のカメにその代償を求めたわけではないのです」と。事実、U氏は大学卒業後に職場で知り合った現夫人と数年間の交際の後、結婚している。しかし、その交際のきっかけがスッポンモドキの雌との離別と無関係だったという確固たる証拠もない。

（註2）この初代部長は当時U氏より1歳年上の2年生だったが、卒業までにさらに6年の歳月を要した。結果的に7年ものあいだ部長を務めることになり、名実共に初期の当サークルを象徴する顔となった。

（註3）実際のところ、ペットショップでは幅3メートル超の水槽で飼われていたのに対し、U氏が借りた1Kアパートに備え付けられた浴槽は、大人が足を折り曲げなければ入れない大きさである。イリオモテジマ先輩と出会わずにいたら、結果としてU氏は早々に愛するスッポンモドキを春のうらの隅田川に放流する決断に迫られていたことであろう。

（註4）このことに対し氏は後に、各サークルによる熱心な新入生勧誘の人波から逃れようと旧校舎に辿り着いただけであり、先輩に会いに行った訳ではない、と弁明している。

（註5）インドネシアのバリ島で行われている「ケチャ」であったという。

（註6）このとき部室にいたのが先輩とU氏のみだったことから、U氏は2人目のメンバーを自認していたのだが、実際には先輩の勧誘によりタイ人留学生や平目氏が既に同好会員登録をしている。ただし、この時点ではまだ両者ともサークル設立条件を満たすための数合わせにすぎず、実際に部室に足を踏み入れたのはU氏が2人目である。

（註7）新入生の女子学生が入会したことに対し、イリオモテジマ先輩は頭を掻きながら得意げ

に「形から入れればいずれ中身はついてくる」と語ったそうである。

(註8) 本稿の執筆にあたり、イリオモテジマ先輩から話を伺うことが出来なかったことが残念ではない。U氏の卒業後に入部した後輩の話によると、8年かけて卒業を果たしたイリオモテジマ先輩は、後にサークルに一層世界を盛り込むべく一念発起して海外に出掛けたのだという。雨乞いを舞ったパプアニューギニアへのお礼参りだという説もあるが定かではない。なお、福島県いわき市の観光温泉施設においてイリオモテジマ先輩とよく似た容貌の人物を見掛けたという話も聞いたが、これも噂の域を出ない。

(註9) 大学の規定では半年の同好会活動の後、正式に「部」として承認されるとある。しかし、U氏が最初に届け出た書類に不備があり、再提出を怠ったままになっていたことが件のボヤ騒ぎにより発覚した。U氏が大学生活の大半を過ごした愛好会は、単なる学内の私設サークルだったのである。U氏の詰め甘さが最後になって露呈した結果となった。

(註10) サークル室で偶然目にしてしまった着替え中の珊瑚女史の太ももの付け根のほくろが印象に残ったあまり、後に結婚に至った夫人の顔のほくろの第一印象がそれに被っていたとは言えないと、生前U氏は夫人が席を外した際にこっそり話してくれた。

自己紹介 平渡敏

小説現代ショートショートコンテストなどに挑戦中のアマチュア小説家、平渡敏です。

本職は弁護士で、好きな作家はウィリアム・サローヤン、O・ヘンリーなど。

今回はプロ作家と肩を並べて作品を発表できるということなので、武者震いをしながら作品を仕上げました。

他の方の作品は短編が多そうですので「箸休めもあっていいかな」などと考えて、オチのあるショートショートを中心に選んでみました。

お付き合いのほど、どうぞよろしく願いいたします。

[平渡敏のブログ](#)

『アンデルセン童話による3つの変奏』

第1話 「恐怖～～マッチ売りの少女～～」

少女が売るマッチを擦ると恐ろしい幻覚が見える。「火が消えたあと、現実が素晴らしく思える」ということで大人気だった。しかし、恐怖というものは長続きしない。人々はより刺激の強いマッチを求め、あまりの恐怖に発狂する人が続出した。(自分のせいで……)と頭を抱え込んだ少女は、耐えきれずに「きゃーっ!」と叫び声をあげた………ところでマッチの火が消えた。

第2話 「賢者の苦悩～～はだかの王さま～～」

王さまのきらびやかな行列が目の前を進んでいる。豪華絢爛とはまさにこのことだ。中でも王さまのお召し物の美しさときたら……。その柄といい、色合いといい、たとえようのないほどの素晴らしさではないか。噂に聞いていただけのことはある。私が感極まっていると、突然、子どもの声が出た。「王さまは何も着ていないじゃないの」。(えっ?)私が驚いていると皆は口々に言い始めた。「何もお召しになっていない」「王さまは裸だ」……。すると王さまは恥ずかしそうになさいながら、私に声をおかけになった。「おまえにもこの服が見えぬか」。私は村で正直者と目されているからお尋ねになったに違いない。私は困惑した。どうやらご自身も含めて皆が皆、王さまの衣服が見えていないらしい。ならばここで私が見えないと言っても罰を与えられることはなかろう。だが、服が見えると言ってしまうとどうだろう。ご機嫌取り、見栄っ張り……。皆が私を非難する声が聞えるようだった。いや、そのくらいですめばよい。下手をすると魔物扱いだつてされかねないだろう。私は静かに答えた。「王さまは裸でございます」

第3話 「白鳥～～みにくいアヒルの子～～」

「こ、これがボク?」湖の水面を見て、ボクは喜びに震えた。そこに映っているのは、まぎれもなく白鳥、あの清楚で真っ白な美しい鳥の姿だった。ボクはとっても幸せだった。ボクはみにくいアヒルではなくて美しい白鳥だったのだ。(そうだ、大空を飛んでみよう)ボクは羽を広げて飛び上がった。しかし、10メートルほどしか飛べずに着水してしまう。(うーん、白鳥になったばかりだからうまく飛ぶのは難しいな)。「ねえ、君、飛び方を教えてくれないか」ボクは仲間の白鳥に声をかけた。「教えてあげてもいいけど、君たちアヒルは長くは飛べないと思うよ」。「えっ、アヒル? でも、さっき湖に……」。「映っていたのはボクの姿さ」

(了)

▼ 作品について △ ▼ △ ▼ △ ▼ △

アンデルセンにリスペクトを込めた3つのパロディ作品です。

実はもっとたくさん作っています。

ボツにした作品はブログで公開していますので、よろしければ読んでみて下さい。

『北風と太陽』

どっどど どどうど どどうど どどう

(北風のやつ、調子こいてやがる。最近あいつが人気者になっているみたいじゃないか。ちくしょうめ。大空の主演は俺様だと決まっているのに)

太陽はどうも気分がよくありません。

「北風くん、クルミやカリンは吹き飛ばせても、旅人のコートは脱がせる事が出来なかったよね」

「いや、できるさ」

(ケッ、なんて進歩のない奴) 「じゃあ勝負しよう」

「よーし」

北風はぴゅうと吹きました。すると、旅人の前を歩いていた女の子のミニスカートがまくれあがって、パンツのお尻が丸見えになってしまいました。

「きゃあ」

女の子がスカートの後ろを押さえると、今度は前から風が吹いてまためくれてしまいます。前を押さえるとまたうしろ。見かねた旅人がコートを脱いで、女の子に着せてあげました。

今度は太陽の番です。女の子がコートを着ているので、そっちを脱がせる事になりました。

太陽はじりじりと照りつけます。

旅人を好きになりかけていた女の子は、コートを返すと旅人が行ってしまいそうだったので、「紫外線が強いみたいだから、もう少しコートを借りていていいですか」と言って、コートを脱ぎませんでした。

北風は気持ちよさそうに「どっどど どどうど どどうど どどう」とうたいながら去っていききました。

スカートのことは少しかわいそうでしたが、愛が芽生えたのですからよしとしようではありませんか。

(了)

▼ 作品について △ ▼ △ ▼ △ ▼ △

小説を書き始めた頃の作品です。

イソップと宮沢賢治とO・ヘンリーを足して3で割ったら出来上がりました。

シンプルな作品で個人的には気に入っています。

ふと気がつくと、あなたの目の前にすてきな本が置かれている。表紙にはアルフォンソ・ミュシャの絵画。あなたは本を開く。人間関係に少し行き詰まってしまった今の現実から離れたくて。すると、目の前に幻想的な世界が広がる。霧にかすんだ向こうの方からバクがあなたを手招きしている。胴体が黒で頭とお尻は白。どうも色が反対のような気もするけれども、それでよかったのかな。それにしあって、案内役はふつうウサギでしょう。あなたはそんなことをブツブツとつぶやきながらバクの方に近付く。バクは「ついておいで」と言わんばかりに、意外なスピードで走っていく。でも、あなたはなぜか全く疲労を感じることなく、バクをどこまでも追いかけることができる。周りには見たこともない植物が嗅いだこともない匂いをまき散らしている。見慣れない風景の中をずいぶんと長い間走った末、バクは深い穴に飛び込んで行く。あなたは「やっぱり」とひとりごちて、バクに続いて飛び込む。長い長い時間が過ぎて、あなたはふさふさした草の上に落っこちる。穴の中ではパーティが行われている。とっても小さな象の鼻の上には、色とりどりのろうそくが明かりを灯している。テッポウウオが天井にぶら下げられた風船を撃つと、割れた風船からキラキラした紙吹雪が舞い散る。頭にダーバンを巻いたハンサムなインド人が一輪車で走り回っている。向こう側ではチンパンジーのグループがラッパを吹き鳴らしている。中近東の音楽だろうか。（あの子たちシンバル以外も演奏できるんだ）あなたは変なところに感心しながら、ふと、子供の頃母親につれていってもらったサーカスを思い出す。（ピエロの衣装が薄汚れていたのよね）。なんだかも悲しくて楽しむことはできなかったけれども、どこか懐かしい思い出だ。あなたはお肉の焼けた香ばしい匂いに気付く。（そういえばサーカスを見に行ったときにはお母さんとホットドッグを食べたのよね）そんなことを思い出しながら振り向くと、バクが二本足で立って、湯気の立つお皿を配っている。おなかが空いたな、と思うあなたの気持ちを見透かしたように、肉の皿が前に置かれる。けれどもナイフもフォークもないから、あなたは仕方なく手で食べようとするが、熱くてとても持てない。そこにハンサムなインド人がナイフとフォークを持ってきてお肉を切ってくれる。「ありがとう」とナイフを受け取ろうとするあなたの右手をインド人のナイフが切り刻む。あなたの指が先の方からトントントントンという小気味のよいリズムと共に落ちていく。しかし、痛みは全く感じない。「痛くないならまあいいか。インド人すてきだし」あなたはなすがままにされて、右腕をなくしてしまったけれども、インド人に抱かれる。ああ、これがカーマ・スートラの秘技なのかしら。あなたはめくるめく時間を過ごして、ふと気がつくと、目の前にすてきな本が置かれている。表紙にはアルフォンソ・ミュシャの絵画。あなたは残された左手で本を開くのだろうか。現実からさらに離れるために。

(了)

▼ 作品について △ ▼ △ ▼ △ ▼ △

2人称・改行なしという実験的なスタイルで書いてみた「不思議の国のアリス」のサイドストーリー

一です。

最近は2人称の小説も珍しくなくて、長編なども見かけますが、かなりの力業にならざるを得ないようです。

掌編は向いていると思うのですが、本作はその形式を活かすことができたのか、少し不安ですがいかがでしょう？

自己紹介 一田和樹

昨年、島田荘司選 ばらのまち福山ミステリー文学新人賞を受賞し、長編ミステリ『檻の中の少女』を上梓させていただきました。

主にサイバーセキュリティミステリ小説やマンガ原作を書いております。

ネット上で短編やショートショート、ツイッター小説を公開しております。

ご興味ある方は、のぞいてみてください。

今回は『雪の女王』をモチーフにした作品を書いたつもりだったのですが、あまりそうは見えません。すみません。

楽しんでいただければ幸いです。

好評販売中！

『檻の中の少女』

『サイバーテロ 漂流少女』

好評連載中！

[『工藤伸治のセキュリティ事件簿』](#)

[『オープンレンジは振り向かない』 \(マンガ\)](#)

ネットで公開している作品群は [こちら](#)

「豚を叩く」

刻実は、前の席の男子にしがみついている豚に鉄槌を振り下ろした。その一撃で豚の茶色の髪から鮮血が吹き出した。ぴぎゃあと豚は叫び、両手をむちゃくちゃに振り回す。二撃目で顎がずれた。豚の声が出なくなった。苦しげな息の音が、ぶーぶーと響くだけだ。三撃目で目玉が飛び出した。細いなにかでかろうじて眼窩にぶらさがっている。豚はまるで暗闇を手探りで歩いているように両手をあらぬ方向に向けて振りだした。

「おもしれえの。これ、まだ見えてんのか？」

刻実は、手を伸ばすと、ぶらぶら揺れている目玉をつかんだ。そして黒目を自分の方に向ける。

「あたしの顔が見えるか？」

刻実は豚に言ったが、答えはない。ただ手を振り回してわめくだけだ。

「つまんないの」

刻実ははき出すように言い、目玉を引っ張った。眼窩から伸びていた細いひものようなものがぶちりと切れた。

刻実は、金属バットについた血をぬぐいながら、教室を見回した。もう誰もいない。廊下は、逃げた生徒と見物に来た生徒であふれかえっている。

刻実は昨日までの自分は、どんな人間だったっけと思った。

——廊下で震えてる連中と同じだったはずだ。でも、実感ないわー。今のが本当の自分って気がする。身体中に力があふれて無敵って感じ。いやほんとに無敵だろ、これは。

刻実は愉快になったので笑った。静まりかえった教室に乾いた笑いが響く。それから隣の教室に向かった。そこにカイがいる。刻実の王子様。

彼女が歩くと、正面の人垣が割れた。ささやきすらもれず、ただみんな恐ろしそうに刻実を見ているだけだ。教師たちもなにも言わない。

隣のクラスは授業中だったが、刻実には関係ない。教室に入ると、まず教壇に立っている教師の頭をバットで殴った。コンと軽い音がして右側頭部が大きく陥没した。眼球がぐるりと回って白目になり、そのまますとんと床に倒れる。少し遅れて花火のように血が飛び散った。教師は壊れたロボットのように両手両足をバタバタと動かしながら、教室に血の噴水をばらまいた。

同時に静かだった教室は泣き声と悲鳴でにぎやかになった。教室から逃げ出す生徒たちは、もともと廊下にいた野次馬たちとぶつかって大混乱になった。

刻実は、面倒なことになったな、と思った。急がないとカイが教室から逃げてしまうかもしれない。その時、カイの姿が見えた。

「カイ、こっち来い」

刻実が叫ぶと、彼女とカイの間を結ぶ道が開けた。刻実は、黙ってその道とその先にいるカイを見た。雪のように白く華奢な男子。とっくりの黒いセーターにジーンズ。刻実を見る目は、まるで捨てられた子犬のようにおびえている。

刻実は、カイの正面に立つととっくりと顔を近づけた。

「あんたの話が好き。毎日聞かせて」

恥ずかしに刻実の声がかすれた。男子に好きだと言うのは初めてだ、と刻実は思った。だが、カイは青ざめて震えるだけでなにも答えない。

「嘘でしょ」

ややあってカイはつぶやいた。

「嘘じゃない。言うことをきかないと、あんたの家族を皆殺しにして家に火をつける」

こうして刻実はカイを手に入れた。

刻実はカイを家に連れて帰り、寝室のベッドに寝かせた。カイはぶるぶると震えてなにも言わない。

「あなたは、ここであたしと一緒に住むんだよ」

刻実は子供に言い聞かせるように、ゆっくりと言った。

カイは猫のように丸まって横になったままだ。膝を抱え、両手をしっかりと組み、親指の爪を噛んでいる。なんだよ、こいつ、かわいいじゃないか、と刻実はたまらなくなかった。

「カイは、あたしのペットなんだから言うこときけ。あんたは一生ここから出られない。だから利口になれ。あたしに気に入られることだけが、これからのお前の人生なんだよ」

「なんかいやだ」

「それがあたしへの口のききかたか！」

「いてててて」

刻実はカイの頬をつねる。カイは痛がるが、その表情がかわくてやめられない。適度に困って戸惑う顔がたまらない。

「うぷぷぷぷ」

カイの脇腹をくすぐると声を上げた。身体をくねらせて暴れる。白いカイの顔が恥ずかしさで赤くなる。それがたまらなくかわいい。

—— この子はなんてかわいいんだろう。この細い身体の中に、あたしを喜ばせる特殊な成分が詰まっているに違いない。身体の中に手を突っ込んで、その成分を取りだしてみたい。

くすぐっているうちに、カイは泣き出した。笑いながら嗚咽する。

「ちっ、今日はこれくらいにしとくけど、これからもっとかわいくするんだよ」

舌打ちしながらも刻実は幸福を実感していた。カイがどう思っているかは知らないけど。

刻実は毎日学校に通っていた。あんな騒ぎを起こしてよく学校に通えるものだと自分でも驚いたが、全く平気だった。どういう仕掛けになっているかわからないが、翌日になると豚も隣のクラスの教師も復活していた。誰かが代わりを持ってきたのだろうけど、その誰かって誰だろう？

と刻実は不思議に思った。きっと『物語の神様』に違いないと思うことにした。

同級生はもちろん学校中の生徒から無視されたが、全く気にならない。教師たちが警察に届けるんじゃないかと少しだけ心配していたが、それもなかった。職員室に呼び出されて、担任に二度とするんじゃないと自信のなさそうな声で言われただけだ。

—— 放課後になれば、カイの待っている家に帰れる。

学校にいる間は、それだけ考えていた。だったら、ずっと家にいればいいようなものだが、それではただの墮落した引きこもりだ。学校で勉強していると、きちんと社会生活を営んで、愛の巣を守っているという実感がある。

—— あたしはちゃんと学校を卒業して、社会人になって働いて、カイを養うんだ。

そんなことができるんだろうか？ という気もしたが、今うまくやれているのだから将来うま

くできないはずはないという根拠のない自信が湧いてきた。

刻実は家に帰ると、エプロンをつけて晩ご飯を作る。料理は得意だ。毎日三品以上の料理を作り、カイに食べさせて感想を言ってもらう。カイは必ずほめる。それがうれしい。

食事が終わると刻実は紅茶を淹れて、カイとリビングの床に並んで座る。そして、トレイの上に置いた紅茶のカップに目を落とし、少しはにかみながらカイにお願いする。

「今日のお話は？」

「うん」

カイは、頬をかきながら話を始める。話の内容は日によって違う。よくこんないろいろなことを思いつくものだと、刻実はいつも感心する。でも、刻実にほめられてもカイは喜ばない。

「なんの役にもたたないから」

「そんなことないって。カイがお話ししてくれるなら、あたしカイを養ってあげる。ずっと一緒にいて、あたしのためだけに話を聞かせて」

「はあ」

「喜ばないの？」

「ええと……」

刻実はカイに幸福を押し売りし、しあわせです、と言うまでつねったり、くすぐったりする。それからカイを抱き上げてベッドに寝かせる。もちろん刻実と一緒にベッド。でもセックスはしない。ときどき意味もなくつついたり、カイの脚を太腿ではさんだり、殺されるならどんな方法がいい？ と尋ねたり、つまりは刻実なりの方法で愛情を表現する。

カイが眠ると、刻実はベッドから抜け出して素振りにゆく。バットが彼女を呼ぶ、振れ！ と。刻実はマンションの屋上に行く。昼間は洗濯物でいっぱいだが、夜はがらんとしてひとけがない。

刻実は微笑むと、バットを構え、鋭いスイングを繰り出す。ブンと空気を切る音が響く。数回振ると、全身に血が巡って感覚がとぎすまされるような気がしてくる。一〇〇メートル先で針の落ちる音だって聞こえそうだ。そして高揚感。

—— いくらでもスイングできる。スイングするほど、自分が高尚な存在に変わってゆくような気がする。このまま天使になれそうだ。

いつの間にか、仲間ができた。刻実がスイングをはじめると、勝手に集まってきてスイングする連中だ。全員無言で刻実に合わせてスイングする。薄闇の中で、きらりとバットが輝く。

一緒に振ると風を切る音が増幅されて楽しいことがわかった。もうブンではない。ごう、と周囲の空気全体を振動させる。

最初は、数人だったが、じょじょに増え続け。やがて屋上いっぱいになった。二〇人以上はいるだろう。全員、少女だ。制服姿、ジーンズ、ゴスロリ、さまざまな服装の少女たちが集まってバットを振る。

もっと来たらどうなるんだろう、と刻実は思ったが、そうはならなかった。増えなかったわけではない。他の場所で振り始めたのだ。他のマンションの屋上、公園、いたるところにバット

を持った少女が出現し、スイングする。

刻実がバットを振り始めると、街全体がごうという音に震えるようになった。そしてまるで花火のようにあちこちで銀色の光が輝く。

たまに刻実は両親の住んでいるマンションを訪ねる。たいていは日曜だ。父親と母親に元気な顔を見せて金をせびる。金がないと言われたら、バットを振る。すると金は出てくる。

こうした規則正しい生活のおかげで刻実の成績はよかった。

—— ちゃんと大学行って就職して、カイを養うんだ。

将来のことを考えると、刻実は楽しくてたまらなかった。

—— 男の子を家に飼うなんて、ちょっと前までは考えつきもしなかったけど、簡単にできた。世の中はちょろい。

刻実は日々をほくほく楽しく過ごしていた。

だが、あふれんばかりの刻実の愛情にも関わらず、カイは幸福そうではなかった。ことあるごとに自分の家に帰りたいたいと言って泣いた。

「聞き分けのないことを言わないで」

刻実がそう言うと、カイは黙ってあきらめた。

「カイは、ここにいるのが一番幸せなんだって。どうしてわからないかな」

「楽しいのは君だけ」

「だからそういうネガティブなことを言うと、それにとらわれちゃうんだ。あたしとカイの楽しい将来を想像してみて。こんな幸せな生活がずっと続くんだよ」

「……僕が話を思いつかなくなったら、どうなるの？」

カイが物語を話さなくなるなんて、刻実は想像したこともなかった。

「物語を話さないのは、カイじゃない。カイがカイである限り、物語は話せるんだ」

「僕だってネタにつまることがあるかもしれないだろ」

「ネタ？ 違う。カイは自然に物語を話せる特別な人間なんだよ。だから無理してネタなんか考える必要はないの」

「だからもし思いつかなくなったらどうなるの？ 僕は、ここを追い出されるんだよね」

「そんなこと考えたこともない。だからカイも考える必要ないよ」

刻実の言葉にカイは黙って顔を伏せた。

「おつかれさまです」

ある夜、刻実がスイングを終えると、ひとりの少女がポカリスエットのペットボトルを持ってきた。白い体操着にぴったりしたブルマーをはいている。

かわいい子だな、と刻実は思いながらペットボトルを受け取った。少女がじっと見ているものだから、刻実は、すぐに飲まなければいけないような気がして、ふたを開けるとラッパ飲みした

「ありがとう」

飲んでから礼を言った。少女は顔を赤らめて微笑む。

「なんで、みんな集まってくるのかな」

刻実は周囲でバットを握って立っている少女たちに目をやって尋ねた。

「他の人と話したことないんで」

「あ、そう。じゃあ、あんたは？」

「ネットで見て。あっ、私、湖黄泉（こよみ）って言います」

「ネット？」

「知らないんですか？ 『昏倒少女』って有名です」

「『昏倒少女』？ あたしのこと？」

「ええ。気に入らない相手をバットで殴って昏倒させるから」

「そんなことしないよ」

刻実は言ってから、でも学校ではバットで殴ったな、と思い出した。

それから湖黄泉は自分が『昏倒少女』のサイトを作り、登録会員を募ったのだと説明した。登録会員は一万人を超え、日本全国で毎晩バットを振っていると聞いて刻実は驚いた。

「なんかいろいろしてくれたんだね」

「とんでもありません。刻実様に仕えるのは、しもべとして当然のことです」

湖黄泉は叫ぶようにそう言い、両眼から滝のように涙を流した。そして床に正座すると頭を床にすりつけた。

「刻実様に、永遠の忠誠を誓います」

湖黄泉の甲高い叫び声が響くと、それが合図だったかのように、全員がその場に土下座し、刻実に向かって深く頭を下げた。

—— 一万人以上も毎晩バット振ってるの？ ほんとかよ。

部屋に戻った刻実は、『昏倒少女』のサイトを見て驚いた。一万人以上の会員がいた。サイトには、刻実がバットを振るシルエットがシンボルマークとして掲げられている。

刻実は不思議な気分だった。この中心にいるのが自分だという実感がない。自分はただバットを振っているだけなのに、なぜこんなことになっているのだろうと不思議に思うだけだ。

ある日、刻実はカイがなにか書いているのを見つけた。刻実はそれが許せなかった。なぜだかわからないが、ひどく腹が立った。カイを突き飛ばして床に転がした。

「思いついた物語をメモしておこうと思って」

「そんなことしちゃいけないだよ。物語は、その時思ったことを話さないといだめ。書きためたら腐っちゃう」

「だって思いつかなくなったら……」

「どうしてわからないの？ カイは特別な人間なんだ。そんな心配必要ない。あたしは、カイに一生を捧げるために生きてるんだよ」

刻実はそう言うのとボールペンを持っているカイの右手をバットで叩いた。バットは一撃でカイの右手を砕いた。カイが悲鳴を上げて逃げようとしたので、刻実はすかさず足で腕を押さえた。そして二度、三度と繰り返して叩く。右手は血と肉でぐちゃぐちゃになり、砕けた白い骨が飛び出した。きれいな骨だな、ピアスにしたい、と刻実は思った。

カイは、獣のように泣き叫んだ。だが刻実は止まらない。刻実自身、なにをしているのかわからなかった。ただ、なにかに憑かれたようにカイの手を壊さなければと必死だった。

気がつくとも床は血の池みたいになっており、そこでカイがのたうちまわっていた。あー、うー、という言葉にならないうめき声を聞いた刻実は、死ぬかもしれないと思った。急に心臓がどきどきしはじめた。うまく息ができない。カイが死んじゃう。刻実は、とにかく血を止めようと思ってタオルでカイの両手を包もうとした。でも、カイの両手はぐちゃぐちゃになっていて、タオルで包もうとするとぼろぼろにくずれ、カイはまた悲鳴を上げた。

その時、刻実の耳がおかしくなった。カイの悲鳴がこだまして耳から離れない。他の音が入ってこなくなった。足下もふらつく。まるで地面が揺れてるみたいだ。悪い夢を見ているように、どんどん現実が離れていく。

「どうしろって言うの」

刻実は叫び、そこで湖黄泉を呼ぶことを思いついた。昏倒少女の中に親が医者の子もいるかもしれないと思ったのだ。震える手でメールを打つと、湖黄泉は中年の男性数名を連れてやってきた。てきぱきとカイをその場で手当する。

「……でいいですよ」

湖黄泉は、何度か刻実に確認してきた。だが、刻実にはその声がよく聞こえない。訊かれるたびに、それでいいよ、と適当に答えていた。

カイの手当が終わると、湖黄泉は数人の少女を呼び寄せ、刻実の部屋の掃除を始めた。血だらけの部屋から血を拭き取り、ソファや壁に飛び散った血もうまくきれいにした。

湖黄泉たちが帰った後、刻実はベッドで眠るカイの顔を見、それからその両手を見た。包帯で巻かれているが、もうそこに手がないことはわかる。手首から先がない。カイの両手は棒にな

った。もうどうやっても絶対に字なんか書けない。

もうひとつカイがなくしたものがあつた。湖黄泉は、カイの陰茎を切り取っていった。湖黄泉は何度も刻実に確認したと言っていた。それならそうかもしれないと刻実は思った。どうせ、自分とカイには必要のないものだ。

—— あたしたちはセックスなんかしない。手をつないで物語を聞くだけでいい。これでいい。これでいいんだ。

刻実は、カイの頭と棒の腕を撫でた。

—— カイは、もう自分で食事を取ることもできない。毎朝、あたしのご飯を食べさせてやるんだ。あーんってね。素敵だ。カイは、あたしがいなければ生きていけないんだ。

そうだ。お風呂にも入れてあげよう。身体を洗ってやるんだ。きっと恥ずかしがるけど、それも楽しそうだ。

でもトイレはいやだな。それくらいは、がんばってもらおう。

なにもできないカイのことを考えると刻実は楽しくて全身が震えた。かわいいな、カイ。すごくかわいい。あたしがいないとなにもできない赤ちゃん。うふふふ。お母さんって呼ばせてみようかな。

カイは、自分がいなければもう生きていけない身体になった、と思うと刻実はひどくうれしくなった。

だが、刻実には心配なことがひとつあつた。怪我をした翌日からカイはしゃべらなくなった。うつろな目でじっと自分の手を見つめているのだ。ほっておくと、日がな一日黙ってそうしている。刻実がかいがいしく食事を食べさせたり、身体を拭いたりしても反応がない。ただされるがままになっているだけだ。

—— このままカイがなにも話さなかったらどうしよう。

刻実は少し不安になった。そうなったらカイは死んだも同然だ。

刻実は、夢を見るようになった。夢の中でカイは物語を話している。刻実はそれを熱心に聞く。そしてカイにお茶を飲ませる。カップを両手で持ち、カイの唇に注意深く当てて飲ませてあげるのだ。そして人差し指と親指でクッキーをつまみ、カイに食べさせる。カイがクッキーをかじる感触が指先から伝わってきて、刻実は震えるくらいうれしくなる。

カイにはあたしが必要で、あたしにはカイの物語が必要。理想的なふたりだ。そう思うと、どうしても頬がゆるんでしまう。そんな刻実を見てカイも微笑む。ふたりは、そうやって互いに笑みを交わす。刻実の理想とする幸福の形がそこにあつた。でも、それは夢の中だけ。

一週間経って包帯がとれてもカイは口を開かなかった。

「ねえ、なんで話をしてくれないの？」

でもカイは黙ったまま、なにも言わない。刻実は、困ったなあ、と思ったし、ひどく悲しくなった。だから泣いた。大声で泣いた。それでもカイはなにも言わなかった。いつものように棒

になった自分の手を見ているだけだ。

刻実は、カイは死んだのだと思うことにした。死んだ以上、埋葬しなければならない。呼吸していても物語をなくしたカイは死人だ。愛するカイの葬儀だ。盛大に送りたい。

湖黄泉と相談して、カイの好きだったケーキ屋を葬儀場所にすることにした。深夜、刻実のマンションの前に数百人の少女がバットを片手に集合した。刻実は自分の部屋の窓から道を埋め尽くす、しもべたちをながめていた。

刻実はベッドで寝ているカイを抱きかかえた。こうしてカイを抱いて、風呂に入れたり、テレビの前に運んだり、何度もカイをこうして抱いて移動したんだよな、と思い出した。それもこれが最期だ。そう思うと、口から雄叫びがほとぼしった。それを耳にした少女たちの目から涙がこぼれた。

刻実は最後の望みをかけてカイの顔をのぞき込んだ。

「なにか話してよ」

でもカイはうつろな目で自分の手を見つめるだけでなにも言わなかった。刻実は、高いため息をつく顔と顔をあげた。

「行くよ！」

自分でも驚くほど強い声が出た。湖黄泉が、はい！ と勢いよく返事する。刻実はカイを抱いたまま、部屋の外に出た。廊下にはすでにたくさんの少女が待っていた。刻実が歩くと、その後を黙ってついてくる。

刻実は道を埋め尽くした少女たちの先頭に立ってケーキ屋に向かった。

個人経営の小さなケーキ屋を昏倒少女たちが幾重にも取り囲んだ。刻実が無言で顎を軽く動かすと、湖黄泉と数人の少女がケーキ屋のショーウィンドウをたたき割った。想像したよりも大きな音がして、警報ベルが鳴り響いた。だが、少女たちは躊躇しない。次々とガラスや壁をバットで殴り、破壊した。

刻実はケーキ屋の中に入り、店の中央にカイを下ろした。カイは自分の手を見つめたまま、なんの反応もしない。

「カイ、好きなケーキと一緒にだよ。おやすみなさい」

刻実はそうつぶやくと、唇をかみしめて店の外に出た。そして右手を挙げる。店の外の少女たちが一斉に火炎瓶を店に投げ込んだ。店は一瞬にして業火に包まれた。それと同時にサイレンの音が近づいてきた。野次馬が集まってくる。少女たちは取り囲まれた。炎の揺れる光が、昏倒少女たちをかげろうに浮かび上がらせた。全員バットを手に持ち、臨戦態勢だ。

「物語を一〇〇個集めると、神様のパズルは完成し、カイは蘇る」

刻実の頭に突然そんなことが浮かんできた。そのまま口にすると、湖黄泉はうなずいた。

「どうすればいいんですか？」

「物語を持たないヤツを皆殺しにする。そうすれば自然と物語を持つ人間が集まってくる。見分け方はわかるね」

「わかります。見ればわかります」

ごう、と音がしてケーキ屋の中で小さな爆発が起きた。炎が竜のように夜空に伸びる。

「日本中の昏倒少女が物語を持たない人間を狩り出しました」

湖黄泉が携帯片手に報告した。

「あたしたちも行こう。一〇〇の物語を集めるんだ」

刻実は、そう言うと両手でバットを握った。大股で近くの野次馬に近づき、脳天に一撃を見舞う。野次馬は声も出さずに昏倒し、血と脳漿をまき散らした。

「物語をもたない者は生きる価値はない。最初から死んでる。死人を葬れ！ 物語を集めろ！」

刻実が叫ぶと、周囲の少女たちから賛同の雄叫びがあがった。夜空を焦がす炎を背にして刻実たちは殺戮を続けた。

了